

小田原史談

第 159 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20

小田原今昔

小田原駅前・幸田界限

相澤 栄一

駅前のこの写真は昭和二、三年の頃のような。日の出屋の看板の見える、今の日興証券ビルのある、三角地帯に木造二階建の広い建物があった。一階の手前は理髪店で、その隣は土産物の売店になっていた。

階段を上がると二階は三五軒というビリヤードで、いずれも桜井さんの経営だった。ビリヤードは、色白で目鼻立ちの良い美しい桜井さんの娘さんが仕切っていた。私もその頃、中学の同窓だった仲間とこの店にいった。常連の客だった、小川さんが看板娘に見初められて、桜井さんの婿さんになった。

その裏の錦通りの駅よりに運送店の丸共、酒店の丸田、菓子店の正栄堂、洋品店のはのや、そば店の寿庵、運送の丸通、等が並んでいた。濠端通りの角に青物店の杉本、パン店の

相田、塩辛・梅干の美濃屋、書店の好文堂、川崎長太郎と共に文学志望で上京した瀬戸一彌さん、彼はユニークな私小説家、葛西善蔵の家で文学修業をしたのだったが果されず、小田原に帰ってきた。弁護士で町議でもあり町の顔役だった親父さんが、彼のために本屋を開店させた。だが彼は商人にはなり切れず、数年で止めてしまった。

路地の角に洋品店の松賀屋、果物の店八百源、その店のみめうるわしい娘さんが、私の中学時代の同窓で、魚河岸で仲買を営んでいた早瀬さんに嫁がれた。だが数年後、彼に召集がきて、悼ましくも日中戦争の犠牲となった。食堂の真砂、旅館の丸登、箱根物産店の平井、小林、梅干のちんりゆう、東華軒の旭食堂、等があった。

路地をへだてて、今の登山のノッポ・ビルの処が高く面積も広がった。その西側が富士屋自動車の車庫になっていた。その東側に富士屋ホテルのレストランがあった。ホテルに行く内外人の休憩所にもなっていた。早稲田の高等学院や大学の予科に通っていた小田原中学同期の私達仲間が御幸座で詩と音楽の会を催した時、講師に招いた西條八十、水谷まさるの両先生を接待したのも、このレストランであった。食事後、店の入口で撮った記念写真も赤茶けてしまった。

箱根湯本行の電車の停車場も、この頃は、今の登山ビルの処は美濃政さんの裏のようだった。この駅前広場は小田原中学の校庭であった。校庭にあった枝振りの見事な松の老木が大正十三年九月迄、駅の広場に残されていた。



きりと目立っていた。板橋のお塔坂から取り入れた、早川の分水である、側の水路だが、此処まできても水は澄んでいて、目高や小鮒もいた。夜になると、カンテラを片手にした鰻の穴釣りの人達も見えた。

裏の元家老屋敷跡に町立高等女学校があって、その北側に黒く塗られた天理教の大きな神殿があった。御用所の路地の南側に村山、北側に藤沢、杉崎、辻本、近藤、荒井、植島、千野、三の丸の土塁の角に牧野、渡辺、川添、等の土族屋敷が草葺屋根で杉の生垣に囲まれていた。当時の御用所の方々の職業は、重人、小学校の教師が三、地方吏が二、塗師が一であった。

御用所と水路をへだてた、北側に三の丸の土塁に囲まれた、元家老格の屋敷跡を、浅草・花川戸の鼻緒問屋が買って別荘にしていた。その隣に清水さんの草葺屋根の家があって、タバコや雑貨を商っていた。

濠の北側の弁財天へ行く道まで三千坪位が原っぱになっていて、自転車競争、巡業大相撲、旅廻りのサーカス、等の場となっていた。又小田原中学の野球部も使っていた。

弁財天への道に入り右側に巨石が腰高に積まれていた、大倉組の重役松田登三郎の別荘の角を曲り、山田執達吏の家の前を右に入ると、両側に城郭の巨石を背高に積み上げた、幸田門跡が残されていた。出入口が高かったので、坂を下り左側が蓮池

になっていて、八百石取りの辻鉄立助の広い屋敷跡に接していた。坂の右側の濠は下幸田への道に添って田になっていて、秋になると黄金色の稲がそよいでいた。

辻鉄立助の屋敷跡は伊藤博文が小田原にきた当初の住居だった。その後、松林に囲まれた岡のようなこの屋敷を元高級官僚で貴族院議員もした田辺老人が先隣り屋敷まで合わせて買い求め、別荘にしていた。孫の輝一郎さんと私は私も懇意でお世話にもなった。田辺さんの先の方に小説家、牧野信一の家があって、彼の母親が私の家の前の才二小学校の教師を長いこと勤めていた。

今の込山ビルの辺りの土族屋敷の跡に小学校同級の坪田の家があった。彼の姉、花子が後年、薮田義雄、西村隆一等が発刊していた詩の同人誌「生誕」の同人になって詩の創作に励んでいた。

今のナツクの処に土族の二屋敷位の空地があって、其処でよく大相撲の旅興行が行われた。後に小田原銀行のテニス・コートになった。その隣に木造二階建の作業場風の建物があった。南隣りに当時上幸田で、ただ一軒残っていて、五〇〇石取り磯田家の屋敷だった。祖父と父が懇意だったので、次男の仲人もした。

下幸田の角、今の駐車場から駅に向う道路までの広い処が草原になっていた。相馬屋敷の跡で私達は此処まで遊びにきた。下幸田への道の左

側に「ちんりゆう」の作業場があった。その先の方に小林病院があった。後年中学の三年生の頃「ちんりゆう」の広い作業場の中にテニス・コートがあったので、岩越、原、澤田たちと共にテニスをした事もあった。

今の郵便局の東南より浴場と料亭をやっていた松琴楼があった。水路をへだてて、筆店の生華堂、米店の須田、京染の加藤、小沢病院、小田原印刷、村山歯科、料亭如月、食堂の水雷亭、浜田医院等が一間月の深い水路を前に、土塁を背にして並んでいた。その南より洋風木造二階建の町役場があった。

この土塁には北條、徳川の封建体制から、明治、大正と時代の転変を見てきた老松がまだ生きていた。又小沢病院裏から幸田門までの土塁には様々な老木がうっ蒼と繁って暗かった。この土塁の老松もまだ切らなくともよかったのに、大正十二年八月に伐採、拂下げられた。明治九年に金禄公債が土族に交付された。だが一般土族への平均額は、五四八円余で低額だった。

新しい生活への転換は容易ではななく、祖先からの遺産の土地を手放さざるを得なかったようだ。このような情勢の中で、高利貸の商業資本は色々な仕方で土族の土地の収奪を行ってきた。それは城下町の一般の現象のようだった。

日清日露の戦争を契機にこの国の産業革命も行われ、資本主義的国家、

日本が発足した。好景気で将軍、貴族、官僚、政商等が別荘を探し始めた。箱根、湯河原、熱海の温泉場に近く、気候温暖、風光明媚な城下町小田原は格好な場であった。城址が御用邸になり、閑院宮、山縣有朋、伊藤博文、黒田候、益田孝、大倉喜八郎その他の方々の別荘も数多く造られた。そして、小峯、天神山、弁財天、南町等の土族屋敷跡が変貌した。

又小田原駅開通による駅周辺の開発で、上幸田、下幸田、揚土、新蔵、戴幸田、日向屋敷等の広域な土族屋敷跡は、跡形もなくなった。

現在、鴨宮、酒匂を初め、小田急、大雄山線、の沿線の各地で土地開発、農地の宅地化による、住宅やマンションの建設が著しく、都市化が進んでいる。マイカーの時代に即応して、大型小売店が規制なき時代を先取りし、資本にものを言わせて、各所に開店している。

現代社会の一般的な様々な矛盾を背負いながら、この城下町も発展への道を辿っている。

アイデンティティを失って、先端的行動や情報化志向を追いすぎると、特殊性のない一般的な近代都市となってしまうだろう。いき、寂、枯淡が形象化された、城下町らしい町造りが出来ないものだろうか。

小田原叢談(九)

石井富之助

小田原の梅

片岡永左衛門氏の郷土研究はなかなか幅が広く、一度何かを調べようとするとまずは片岡さんの書いたものに目を通しておく必要がある。

小田原の梅についてもそうで、研究というほどのものではなくほんの断片にすぎないが、『安思我里』第三号に書いていることはやはり参考になる。読み易く書きあらためると次の通りである。

梅樹は小田原の地味に適したためか古くからあった。北条氏が在城するようになって、軍糧のため植栽させたという説も伝えられているが、それは北条の誰であるか判明せず、それらについての文書もまだ発見されていない。その後大久保家の領有

栽されていたかどうか、片岡さんのいうとおり記録がないからはっきりさせることはできないが、一般的にいつて植えられていたであろうと推測することは十分できる。

元来、梅は中国の原産で、日本に伝来したのは、万葉集に梅の歌がかなりあるところからみて、奈良時代以前だといわれている。花の美しさをめでたのはいうまでもないが、それにもまして梅の実が食用、薬用として珍重されていたことは事実である。梅干も早くから作られており、特に戦国時代には兵食として重要なものとされていた。こういうつは食べていたであろうと

早合点しがちだが、どうやらそうではないらしい。

細川幽斎の『軍中士の心得覚書』には

出陣の時は具足の綿かみに梅干をつけて行くのがよろしい。のどがかわいて水がない時など梅干のことを思い出せば自然に口につばがたままるものである。

とあり、また『雑兵物語』には

一生懸命に働いて息が切れたら、打鯛の底に入れておいた梅干をとんで食べてちよと見ろ。必ずなめたりしないもんだぞ。食うことはさっておきなめてものがかわくから、命のあるうちはその梅干一つを

大事にして息合の薬にしろ。

とある。息合の薬というのは呼吸を整える薬ということである。

これなどをみると、梅干は食べるためというよりはむしろ薬として携行させたもので、雑兵は一粒しか支給されなかったらしい。ともかく梅干は貴重なものでこの大名でもその用意はしたであろうから、北条氏といえどもその点ぬかりがあったとは思われない。ただ資料がないからこれ以上はわからないのである。

小田原の梅干は東海道がひらかれて、上り下りの旅人がふるるにしたがって次第に作られるようになったのであろう。箱根の山中で霧にとじこめられた時、梅干を口にふくんで息を吐くと霧がはれるという云い伝えがあるところからみると、小田原が天下の嶮箱根八里をひかえる宿場町でなかったならば、梅干など生産されなかつたかも知れないのである。

片岡さんは大久保忠真が大いに奨励したといっているが、忠真の時代、文政七年(一八二五)に書かれた『甲



カット 内田美枝子

となり、加賀守忠真公が奨励して家中にも神社や寺にも栽培させたので非常に多くなり、殊更に梅園としたものはなかったが、花時には西海子、八幡山、揚土、谷津、中新馬場、大新馬場、幸田等いたる所に芳香ふくいくとして、居ながら花見ができた。後に公園などといいはやされた小峯も丘上を畑地となし、どこも同じように杉と梅を植付けたが、西洋流練兵の必要から、その一部を練兵場とし残りの畑に栽培した梅があったわけで、ついに花時には薫りに誘われて杖を曳く者も出てきた。が、それは維新後の事である。

北条時代に兵食として植

辰旅日記」という本がある。下田奉行であった小笠原長保が江戸から下田までの見聞を書いた道中記である。

その小田原宿のところに小田原の城主大久保のぬしから町奉行某をし

て、しそ巻梅干を一つ樽たまわった。この所の名産で、この梅とかつおのしおびしおなど売る家が多い。

とあって、もうこの時にはしそ巻梅干が土産物として売られるまでになっていたらしい。

忠真には『春鶯集』という和歌集があるくらいで、梅に寄せる思いも深かったと推察されるが、それと同時に梅の実を有効に利用するという実用面のこともある。わせたていたにちがいないと思う。小峯を除いては梅園を作るといことはせず、神社、寺院、家士の庭などに植えさせたという。大正時代にわたしの家では今の錦通りの北側に「西田」という相当広い地所を持っていた。藩士西田義助の居宅であったからこう呼んでいたのである。ここには四、五十本の梅の木があって、毎年その実で梅干を作って

いた。また下幸田(東宝館通り)、上幸田(お掘端通り)その他屋敷町ではこの家でも数本の梅の木などいところはなかった。忠真時代からの名残といっているであろう。

小峯は明治に入ってから小峯梅林と呼ばれた。明治二十九年十二月発行の小西正寛著『小田原案内記』にはこんなふうにするされている。

小峯の梅林は小田原城内の西南部にあり、二宮神社の西南の道を行くと、広さ十数町の梅林に至る。ここは大久保氏の練兵場を畑となつたのは近ごろのことである。四方の岡はことごとく梅の木なので早春から芳香がふくいくとして銀世界のようなけしきになる。遠方から来遊するものが年々ふえている。まわりの山には松竹がしげり、一軒の家もないので小鳥が集ってさえずり、他の梅の名所と趣を大いに異にしている。

であったらしく、その「小田原日記」には一月二十三日 晴れたり。箱根の諸山白し。小峯に行く。花の着くるわずかに二分。夕近くなりて風出す。月円かにして明かなり。二月三日 晴、小峯に行く。開くもの四分。處々紅梅を見る。二月九日 好晴。暖かなり。馬場(孤蝶)氏と共に小峯に行く。馬場孤蝶だけでなく、佐々醒雪、大町桂月など訪れる者は皆小峯に連れていったようである。泉鏡花には「城の石垣」「千歳の鉢」など五、六篇の小品があり、小峯の梅林のことが書かれている。仙境といった感じの梅林として知られていたらしい。

わたしは知っているのは大正時代の小峯で、そのころには公園という名で呼ばれていた。入口に大久保神社の鳥居があった。まんなかの平地は町民の運動場になっていて、時々自転車競走が行われたりした。まわりの梅はそのまま保たれ、長く町民の憩いの場所として親しまれていた。その姿を根こそぎ変えてしまったのは、戦後ここに施設された競輪場だったといっているであろう。

小田原のしそ巻梅干は核が小さく肉厚く実ばなれがいいことと、しそが極めて良質であったこととで名産品としての声価を高め、需要も次第に増大した。

中野敬次郎氏によれば文化、文政のころにはすでに小田原地方の生産では間に合わず、漬物業者は甲斐、奥羽地方まで梅の実の買出しに出かけたということであるが、少なくとも明治に入り、日清、日露両戦役に軍需品として大量の注文を受けてからはこの傾向は一層甚しくなり、移入先も全国各地に及ぶまでになった。小田原の名産は蜜柑にして、蒲鉾にして、すべて土産物から商品、輸出品というように移行し発展をしているが、梅干もまたみごとに商品としての地歩を築いたのであった。

戦後、鈴木十郎市長は梅干生産の重要性を唱えたが、それを受けて昭和三十二年下曾我に梅の研究会が生まれ、以来梅の木の植栽、梅干をはじめその加工品の生産に努力した結果、現在では下曾我の梅は二万本を越え、地元産の梅干もいちじるしく増加するに至った。

そして、毎年二月には城址公園と相呼応して梅祭りを催し、観光的にも大きく寄与するまでになっているのである。

地元の梅を原料とする梅干生産がふたたびさかんになってきたとはいえず、数量的には和歌山県の田辺地区、南辺地区には遠く及ばない。わたしはかねがね梅干の味は十年漬のものが最高だと考えている。一年や二年漬のものは酸味が舌を刺すほどに強いが、年が経つにつれてその酸味がうせてやわらかな味になる。わたしはかつてしそ巻梅干を十年間保存して食べてみたが、酸味、辛味ともにまことにほどこよく、しかも何ともい

えない甘味さえ出てきて、これは人工では到底作り出せない味だと思ったものがある。

むかしから小田原名産といわれた梅干はどこまでもしそ巻梅干なのであって、良質の梅干を葉柄の細くやわらかいしそで五角型または六角型に包んだものであった。ところがいつころであったか、しそ巻梅干という

中味にぐちゃぐちゃにくずれた梅干の入っているのが出まわったことがある。もつての外のことで小田原名産としての名をみずからはずかしてしまっていることになる。十年間も寝かせておくことはたいへんなことだが、少なくとも名産というからには十分に吟味したものを食べさせてほしいものである。

小田原の市民はむかしか

ら梅に対して特殊な感情を持っていてよいのである。その現れと云ってよいのである。昭和十五年市制施行の際制定された市章は梅の花と波とを圖案化したものであり、昭和五十一年には市の花として梅が選ばれている。それならばなおさらのこと梅を大事にしたいものである。

(続)

銀行支店長を勤めた

片岡永左衛門さん

南里 哲

関東銀行小田原支店長の片岡さん

片岡永左衛門さんが遺した郷土史関係の著作には、『明治小田原町誌』『足柄資料』『小田原大秘録』『駅鈴余音』等々数多くあるが、石井富之助さんは、『明治小田原町誌』を一番高く評価されている。

「これがなかったら小田原の明治のことはまるでわからなくなっていたであろう

う。これだけでも郷土史家の片岡さんの功績は、永久にたたえられなければならない」と。

また、『神奈川県柑橘史』(昭和四十九年、神奈川県農業協同組合連合会刊)には、片岡永左衛門さんを神奈川県「柑橘開発の先覚者」として讃えている。おそらく『明治小田原町誌』が手がかりになったのであろう。これを基に調査を進めていくところ、先覚者とするに

ふさわしい業績が明らかにされたに違いない。ところで、片岡さんの郷土史の仕事を手伝った人がいる。配島留吉さん(故人)がその人。

配島さんは、若き日、野沢屋百貨店社長宅に住み込み、夜間、横浜商業学校に通学、苦学力行した人。苦学など今どき通用しない言葉だが……配島さんが横浜興信銀行の前身の関東銀行の小田原支店に入行したのは、大正十二年(一九三三)廿歳のとき。支店長は片岡さん。片岡支店長は六十を超えており、年齢は祖父と孫ほどの開きがある。手伝ったといっても、片岡さんが書いたものを謄写印刷するのが仕事であった。

手伝った期間は、片岡さんが銀行をやめた大正十五年までの間の三年間ほどである。

しかし、その仕事がどのような内容のものであったか明らかでない。でも『明治小田原町誌』ではなさそう。和とじの全五冊のそれが刊行されたのは昭和六年のこと、その間五年ばかりの喰い違いがあるからである。あるいは、『明治小田原町誌』は、銀行を辞めてから始めた仕事かも知れない。しかし、その目論見は支店長時代に既であったであろう。

印刷の手伝いはもちろん銀行がひけてからであった。当時、銀行を利用する者といえば、商売を営む人に限られている。また、紙幣の単位は百円が最高で、取り扱い件数やその金額は少なかった。三時半に店を締めると、四時前にはその日の仕事は終わっていた。時間的な余裕は充分にあった訳だ。

関東銀行小田原支店は、青物町の綿屋と洋品屋の間に挟まれるように奥まったところにあった。今の浜町

三丁目一番四十四号の松崎屋陶器店付近である。行員数は七、八名位。本店は藤沢にあり、小田原に支店が置かれたのは、明治三十年(一九〇七)五月で、初めは藤沢貯蓄銀行小田原支店として開かれ、明治四十三年(一九〇八)関東銀行小田原支店となった。支店は、小田原の他に横須賀、三崎にも置かれ、他に出張所が二カ所設けられていた程度で、現在からすれば銀行の名に値しない小さな規模のものであった。

しかし、明治時代は、地元の資本によって創設された銀行が町村単位にあった時代である。足柄上、下郡の例では、小田原銀行、小田原通商銀行、足柄銀行、桜井共益銀行、松田銀行、川村銀行、足柄農商銀行、鞠子銀行、酒田銀行、共済銀行、吉浜銀行、などが挙げられる。それ故支店を何か所も置くのは地方銀行としては、大きな部類に入っていた。

配島さんは、片岡さんについて次のように語る。

片岡さんは町の助役時

代に海岸の石の堤防を建設するのに非常に骨をおられたと聞いております。人柄の良い上品で温厚な方で旦那という言葉がふさわしい人でした。なにも銀行に出なくてもよかったです、今と違って、当時支店長というと名誉職で銀行の看板の役を勤められた訳です。銀行に来てものにも仕事がありません。客と話をする必要は滅多になく、奥のほうでよく筆で書き物をされていました。仕事というと時たま本店に呼ばれて出かけて行くくらいのものでしたね。支店長にいつごろなられ

たか記憶しておりませんが、国道の拡張工事が行われた大正七、八年ころよりはもっと後のことでしょうか。町から移られたのではないかと思われます。

震災後預金整理で骨折った片岡さん

片岡さんは、支店長になる前には町会議員、助役、学務委員などの要職を歴任している。小田原宿の本陣で代々町役人を勤めた家柄であった。そんなことから銀行の支店長の役にひっぱり出されたのであろう。『日本国政事典』で調べると、大正九年(一九二〇)五月二十六日関東銀行に取り付け騒ぎがあり、横浜正金

銀行、神奈川県農工銀行の援助により二十九日に平穩になったと記されている。なにか取沙汰されデマが飛ぶと預金者が引き出しに殺到する状態があった頃である。

関東銀行の例ではないが、計算が合わないので夜遅くまで突き合せのため行内に電灯をことうとつけて仕事をしていたら、支払い停止になるのではないかと預金者に勤ぐられたという話もある。

ことによると、片岡さんが支店長に就任したのは、関東銀行に取り付け騒ぎがあった後のことかもしれない。

頭取や支店長に昔から何代も続いた、その土地の素封家・名望家が就任したのも、銀行の経営基盤が現在ほど確固たるものでなく、銀行の信用が人に依存していたことを物語るものでもあろう。大正時代、「うしろろ」の先々代外郎藤右衛門さんが、初代の駿河銀行小田原支店長に就任したのもその例である。

昭和に入ると支店長は、土地の素封家ではなしに銀行内部から起用されるよう

になったが、定期預金証書や預金通帳などの支店長名はゴム印でなしに自筆による署名が昭和十年代まで行われた。支店長不在のときには、支店長代理が代わって署名をしている。支店長個人に信用を求めた時代の名残りでもあったといえよう。

ところが、大正十二年の震災に出会って片岡さんは非常に苦労している。このことについて配島さんは次のように語る。

震災さえなければ、片岡さんはなにもなく骨折らずに支店長の役を勤め終わられたと思います。

ええ、震災の時といえますと

そうですね。昼食を食べに奥の座敷に入ろうとこまちに足をかけると、突然グラグラと来ました。外に飛び出す間もない。閉じこめられすぐ出られなかった人がいました。私はカウスターに置いてあった瓦鉢の火種に足をつこんでしまいました。客の煙草用に置いてあ

たものですが、無我夢中だったのですね、足を火傷しましたがその時には痛みを感じませんでした。はい出すまでにどの位時間がかかったものでしょうか非常に長かったような気がしました。

ひとりは先輩の旧小田原藩の土族で出納係の村瀬亭さん。もう一人は同僚の荻原さん。『片岡日記』によると、荻原は既に脱出している

はい出すすぎがありません。いざという時になにが役に立つか分からないものですね。村瀬さんが持っていたキセルが役立ちました。それで土壁をこじあげ脱出しました。

村瀬さんは煙草を吸うのにキセルを使っていました、当時は行員の服装というと和服と角帯、前垂掛をした時代でした。芯が細竹であまれた土壁をもし手であけるとしたら大変なことだったと思います。

村瀬さんのキセルのことは、その後一つ話

折込み現代どどいつ

高井風喜洞

お 奥の細道
だ 誰かに逢えば
わ 別れを惜しむ
ら 蘭の花

(NHK現代どどいつ作家)

になりましたが、村瀬さんが普通の煙草を吸うようになったのは関東興信銀行時代の昭和になってからだったでしょう。時代が、キセルを灰皿にポンポンとするような訳にはゆかなくなつたのです。

片岡さんは奥座敷にいて無事でした。皆元気でいるのが分かる。家族の安否を確かめようと、それぞれ家に戻りました。再び銀行に戻った時には宮小路の富貴座の前にあった酒屋から火が出て類焼してしまいました。片岡さんはお孫さんを二人とも亡くされ、非常に力をおとされましたが、しかし、支店長としての仕事がありました。普段、支店長として仕事らしい仕事はなにもなかったのですが――。

銀行はしばらく休業に入りました。銀行が再び開かれるようになると、預金額の何割だったか忘れましたが、預金を一律に減らす承諾の調印をとって歩く仕事がありました。当時

山頂に立つ片岡さん(元本 尾崎正氏所蔵)
(この年八十三歳で亡くなったという)



銀行は不動産を担保に貸出していました。震災で駄目になってコゲつきが出たため、その分だけ預金額の切下げを預金者に求めた訳です。

大口預金者には片岡さんが回りました。当時六十三、四歳だったと思いますが、体は小柄でも丈夫な方でした。私はお供をおおせつかつて、汗をふきふき、握り飯を持って預金者の所を歩き回りました。網元の漁業家で最後まで承諾を渋った方があり、小八幡あたりまでお供をしたことも覚えています。

片岡さんが名実共に支店長としての仕事、預金切り下げの難事がかたがついた時は、取り付け騒ぎがしばしば起る弱小銀行の、経営安定のため、整備統合の時代に入っていた。いわゆる大正末から昭和の初頭にかけての金融資本の集中化である。

『日本国政事典』によると、大正十三年(一九二四)十一月二十五日、関東銀行は大磯銀行の支払停止の余波を受け十二月七日まで休業している。翌二十六日は小田原銀行と小田原通商銀行が合併して、小田原実業銀行として新に発足している。しかし、それも束の間、小田原実業銀行は、翌十四年九月二日に帳簿整理を理由に支払い停止、そのまま休業に入っている。その整理の跡を承け明和銀行となつて再出発したのは年輩の人の記憶に残るところである。関東銀行も似た運命をたどった。この銀行と関東貯蓄銀行の整理の後を承継して新設の関東興信銀行が大正十四年十二月十五日成立している。小田原支店は幸一丁目二十番地の所に置かれた。今の本町二丁目三番

の割屋敷(わりやしき)の入口のところであった。

その頃片岡さんは既に支店長の職を離れていた。『明治小田原町誌』の刊行に全力をそそがれるようになったのはそれからのことであろう。

ついでながら、付け加えると、関東興信銀行は、昭和三年(一九二八)三月、横浜興信銀行(昭和三十五年横浜銀行に改称)に吸収された。

(付記)

この稿は、昭和五十年(一九七五)一月、『神静民報』に発表したものを加筆したものである。

なお、『片岡日記』には、片岡さんが銀行をやめたあと、配島さんは釣った鮎を片岡さんに届けるなどしており、片岡さんは、配島さんのことを「律儀な人」と記している。配島さんは、横浜興信銀行伊勢原支店長を最後に関連会社役員として出向。退職後は、小田原市東町二丁目の自宅で盆栽いじりや悠悠自適の日を送っていたが、晩年には自宅を長女夫妻に譲った。そして横須賀市役所に勤める長男慎一郎氏の許に身を寄せていたが、昭和六十一年(一九八六)七月、八十四歳の生涯を閉じた。

大久保忠良 徳大寺照子

縁組覚書 (1)

小野意雄



贈られたものと思われ
ます。しかし菩提
寺の天台宗教学院で
も「忠良尊」の尊号
で供養されており、
そして『高祖以来御
縁仏法号詳記』を編
さんした故川上刀根

ので、小田原有信会から小田原市立
図書館に「小田原有信会文庫」所収
の文書・資料として、寄贈され、所
蔵されています。
◇『大久保氏系譜』(神奈川県史料
編4近世(1)所収)
◇『華族譜要』
◇『昭和新修華族家系大系』
◇『大久保家系譜』類(小田原有信
会文庫所収)
◇『御西敬帳』類(同)
◇『大久保氏高祖以来御縁仏法号詳
記』(同)
◇『徳大寺家系譜』(東大史料編さん
所蔵)
なお、東大史料編纂所所蔵の左記
の資料にも、特記事項はありません。
◇『大久保家譜』(系譜・統藩翰譜書
統) 大久保忠良明治七年差出原本20
丁

目次

一 はじめに

二 資料について

三 ご縁組み

(1)ご縁戚

(2)家臣への申達

(3)続く慶事

(4)慶事と小田原の動向

(5)官許の縁組み(以上本号)

(6)破談に終わった縁組み

四 忠良公の事績

(1)略歴

(2)忠良公隠居

忠禮公再相統

関係文書抄録

(3)教導団入学関係文書目録

(4)「餘綾之夜話」抄録

(5)明治八年

(6)忠禮公「御自書日記(抄)」から

五 徳大寺公純女

(1)徳大寺家家譜抄

(2)大洲の加藤家

(3)阿部家家譜抄

(4)両敬関係の修復

(5)公純卿と實則卿

一 はじめに

明治維新にあたり小田原藩では、
藩主大久保忠禮公が塾居を命ぜられ、

跡を支藩荻野山中
藩主大久保教義の
長男岩丸を養嗣子として承継させる
ことになり、時局に対応しました。

明治元年九月二十七日
朝廷命忠禮以永塾居
同年十月二日
岩丸嗣宗家
同年十月八日
忠禮公より御諱忠良と被進候

この忠良公については、明治十年
三月二十九日西南戦争に従軍中、熊
本県山本郡木留で被弾・戦死、時に
伍長だったことはよく知られており
ますが、ほかのことはあまり知られ
ておりません。
この度、大久保氏代々の藩主夫人
のご出自・ご美家の藩名・石高や、
藩主ご息女のご婚家等を調べる機会
がありました。その作業のなかで、
忠良公については特に、つぎの二点
につき関心をもちました。

1 仏教式の法号(戒名)ではなく、
神道による「忠良尊」という尊号
が贈られております。明治十年十一
月十四日靖国神社に合祀された時に

五郎氏も「忠良尊」としております。
そこで念の為と思い、改めて教学
院に問い合わせしてみたところ、仏式
に改名した法号を贈ることはしない
で、「忠良尊」で供養しているとの
ことでした。

2 忠良公に、ご夫人はおられなかつ
たのか。これが二つ目の関心でした。
この関心をテーマにアプローチした
結果を、この小文にまとめてみまし
た。

二 資料について

(1)資料リスト

忠良夫人に関する資料としては、
つぎの資料がありました。

1 小田原有信会 昭和六年度会報
付録「史蹟調査報告第三」27〜37頁
『史蹟踏査の片影』 三 大久保忠
良』

2 小田原有信会編『落穂』
昭和十三年七月下旬
『落穂 大久保忠禮』
昭和十三年七月下旬
『落穂 大久保忠良』

いずれも瀬戸秀兄の編集によるも

系譜類には、内縁関係(例えば縁
組はしたが、結婚前に当事者の一方
が死去した場合でも、「未娶而未没」
とか「未嫁而未没」と記録されている
のですが、忠良夫人の場合には、そ
うした記載もされていないのです。
しかし、両敬(武家相互の訪問・応
対・書信などに同等の礼を用いること)

広辞苑) 関係をアプローチするには
欠かせない文献です。この小文でも
参考資料として利用させて戴いてお
ります。

三 二縁組み

(1) 二縁戚

大久保忠良 幼名岩丸

從五位下 相模守 從五位

実 華族從五位大久保教義長男

母 加納遠江守久儔御女

室 徳大寺從一位公純女

御縁組願之通被 聞食候事

明治三年庚午十二月十二日

※私註 大久保教義 荻野山中藩主

一万三千石

加納 久儔 上総一宮藩主

一万三千石

(2) 家臣への申達

右は、『落穂』所収の忠良公年譜
の頭書です。そして、同書所収の
「御在城日記 明治二己巳年(御側
目付日記抄)」には、つぎの記録があ
ります。

一 同年六月十日 三御目付江

殿様御儀今般徳大寺前右大臣様娘
君様御縁組御内縁被為整此段為心得
申達候

右之趣奇々可被申聞候

(3) 続く慶事

ここで注意してみますと、忠良公
が小田原入りしたのは明治元年十月、
翌二年六月七日には、「任相模守叙
從五位下小田原藩知事被仰付」られ、
その直後の、同月十日の前記の家臣
への申達です。以降、忠禮公につい

ても、つぎのような慶事が続きます。

同年十月四日

以特典免永蟄居

同年十二月二十二日

奉朝旨輔知事参与藩事

(4) 慶事と小田原の動向

これらの動きからみる時、朝廷関
係、新政府での小田原藩についての
処置・待遇は、非常な速さで改善さ
れて来ていることが読みとれます。

この小文では詳しく紹介しませ
んが、忠礼公の『御自書日記(抄)』
をみますと公は、有栖川宮様のほか
公卿衆では九條殿・三條殿・徳大寺
殿や、大名衆では尾張(徳川)殿・
備前(池田)殿・因州(池田)殿・
姫路(酒井)殿・松山(久松)殿等
と親しく交遊を深められております。

戊辰戦争での小田原藩の動向をもつ
て、それに対する官軍の史話から、
私たちは、明治以来の小田原につい
て、暗く暗く、苦い追憶として把ら
えて来ています。必ずしも、そうで
はないのではないかと。事情や事態の
見え方の違い・ズレがあるのではな
いか。そういう問題があるのではな
いかと、再検討を考えさせられる事
例です。もっとも小田原人の、そう
したズレた感覚・ものの見方・考え
方が、その後の歴史を歩ませたのか
も知れませんが。

今回、合わせて有信会文庫の『史
蹟調査報告』や『史談速記録』を通

読し、山岡鉄舟の再三にわたる、戊
辰戦争に際しての小田原藩の動向に
ついて、理解ある取りなしをしてい
る態度等に接すると、右に述べたよ
うな感想を強くします。なお後述し
ますが、忠良公は一時、鉄舟に師事
します。この時にも鉄舟は、忠良公
の学友として徳川家達公を配される
など、大久保家に好誼を寄せてくれ
ています。

(5) 官許の縁組み

ところで明治二年六月の家臣団へ
の申達時には、内々に縁談が整った
ということでしょう。官への願出が、
翌三年十一月にされ、十二月に裁許
されています。

今般徳大寺從一位公純女私妻
に縁組仕度奉願候此段宣

御沙汰可被下候以上

庚午十一月二十八日

大久保小田原藩知事忠良

弁 官

御 中

徳大寺從一位公純女其方妻に

縁組致度願之趣被聞食候事

庚午十二月十二日

太 政 官

(続)

賀正

平成七乙亥年



戊辰戦争後日譚

高田 喜久三

第一章 伊庭八郎

私がかって平成三年に『戊辰箱根戦争始末』という一書を著した。そこに登場した大久保小田原藩の人々はさておいて、相手方遊撃隊側の人物はいづれもが青年気鋭の士であり、彼らのその後の消息は如何なかったのかと、常に心にかけていたが、このたび『遊撃隊始末』なる一巻を手にしたので、その詳細を識ることが出来た。そこで慶応四年すなわち明治元年五月の箱根

箱根山崎合戦錦絵



戦争における遊撃隊側の主たる人物、林昌之助、人見勝太郎、伊庭八郎三名の末路を語り、歴史大転換期に登場した人物のその後の流転人間模様を描いてみたいと思っただのである。

右のうち伊庭八郎は江戸下谷御徒町に開かれた心形刀流伊庭道場の八代目当主で、当時門人壱千名以上と言われていた。慶応四年五月二十六日の箱根山崎の決戦においては、白兵戦の中、剛剣を揮って暴れたが、やがて小田原藩士高橋藤太郎と刃を交すうち左手首に手傷を負った。ところがすかさず八郎の従僕鎌吉が放った銃弾によって藤太郎は仆れ死んだ。藤太郎の墓が今も早川観音真福寺境内に苔むしていることを知る人は多くない。一方八郎は血潮の滴る左腕を支えながら畑宿に逃れ、同地で総大將林昌之助の侍医によって一応の処置として左手首を切断

されたのである。

やがて敗れた遊撃隊の残兵はあちこちに散り主力は熱海に逃れさらに網代から漁船三隻を雇って房総に渡る。この時江戸湾に停泊していた幕府軍艦開陽丸に乗りこみ、八郎は艦内で軍医の執刀によって化膿した左腕を切断隻腕となったのである。

当時、小田原藩はたとへ一日なりとも遊撃隊と合隊して官軍に抵抗したことを、ひそかに恥辱と考えて戦闘の詳細をひた隠した模様で、そのため小田原の人々は錦絵に描かれた伊庭八郎の勇姿のみしか知らなかったのである。艦を降りた八郎はその後房総のいづこかに潜んでいたが、幕府海軍副総裁榎本釜次郎(のちの榎本武揚)が幕艦を率いて函館に渡り、反政府軍の旗揚げをしたのを知り、苦心惨憺の末函館に至り榎本軍に投じた。この時人見勝太郎も函館に来たって五稜郭に立て籠った榎本軍に参加した。しかし榎本軍を攻撃する新政府は兵数も多く武器も優れていたもので、松則を失い、八郎は木古内戦にて砲弾の破片を浴び、五稜郭に運ば

れたが遂に再び起つことは適はなかった。かくて隻腕の剣豪も、銃撃砲撃の近代戦の中であえなく悲運の戦死を遂げたのである。榎本軍に加わっていた新撰組の土方歳三もこの時戦死している。しかし八郎と戦いを共にした人見勝太郎は、五稜郭開城と共に榎本釜次郎らと官軍に収容され、その後多彩な人生を送ることになる。

伊庭八郎はこの時若冠二十五歳である。

第二章 林昌之助

さて遊撃隊総大将格の林昌之助の祖はもと七千石の旗本であったが、文政八年三千石を増増され、上総請西藩一万石の大名となった。昌之助はその三代目で、箱根戦争の時はまだ十九歳の青年大名であった。

箱根戦争に敗れた彼は再び房総に帰り、会津藩が官軍と戦っているのを聞き、これに参加せんと遊撃隊残兵と共に白河口で官軍と戦ったが、会津城の陥落を知り、さらに徳川慶喜が静岡に移され七十万石を与えられたと聞かや、我が事敗れたり

伏した。請西藩一万石は召し上げられ、家名断絶のところ異腹の弟が家名を継ぎ、東京府士族として三百石を給せられた。しかし昌之助は唐津藩小笠原家預りとなり、唐津藩江戸屋敷に謹慎することとなったのである。

やがて禁を解かれた昌之助は名を忠高と名のり郷里請西村に帰り、もと側室ぬいと共に農業を営むことになった。

しかし俄百姓の殿様家業は見事失敗。その後東京府の属吏となったがこれも続かず、やがて函館に渡り同地の物産商仲栄助商店の帳付となる。しかしここが倒産するや大阪に流れて大阪府の属吏となったが生活は貧窮をきわめる。妻ぬいも離婚、もと請西藩関係者の援助によって漸く生活を保つ有様であった。

しかし旧家臣らの尽力によって明治二十七年三月、特旨をもって華族礼遇を賜り、従五位に叙せられた。時に忠高四十五歳である。維新後三十年近くを経て明治政府も、かつての賊軍の汚名をそそぐことに転換し、西南戦争後、西郷隆盛も賊軍汚名を払拭されのち上野

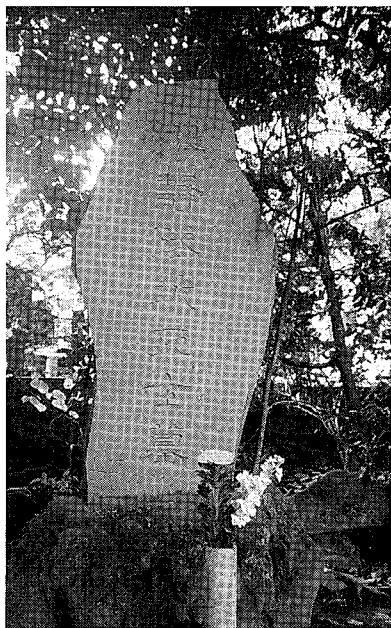
に銅像まで建てられた。それだけ明治政府の基盤が安定したのである。永いこと明治天皇と会うことの出来なかつた徳川慶喜が勝海舟の尽力によって宮中に参内したのは明治三十三年である。

林忠嵩もその後娘ミツが経営する横浜のミカド商会に寄寓することとなる。星移り年変り昭和十二年十一月十一日、菩提寺青松寺において、戊辰戦後請西藩戦没者の七十年招魂祭を修するにあたり、彼は記念碑に次の歌を刻んだ。

散るとも花のかほりはのちの世も
人の袂にうつりこそすれ

さらにこの時の挨拶に長年の労苦を語り、次の句を

遊撃隊戦死土臺(早雲寺境内)



遣わした。

琴となり下駄となるのも桐の運

このとき林昌之助忠嵩九十歳である。彼は若い時から歌を詠み絵を描くことを好んだと言う。そしてこの日から三年余のち、昭和十六年一月二十二日、九十四歳の生涯を閉じたのである。世に昭和まで生きた最後の大名として識られることになった。

第三章 人見勝太郎

次に箱根戦争において参謀的役割を担った人見勝太郎であるが、彼の父は二条城詰の鉄砲奉行同心であるが、請西藩林昌之助が幕府支援の挙兵を聞くや、直ちにこれに参加し箱根関所砲撃ののち小田原城に入り、

官軍を迎え撃つには江戸湾に停泊中の幕府軍艦に乗船中の幕府海軍副総裁榎本釜次郎に依頼して、海上より援軍射撃を計画、直ちに小田原藩家老渡辺了叟の手引で、日本橋へ向う鯉船に乗りこんだ。勝太郎この時若冠二十四歳である。

勝太郎は首尾よく榎本釜次郎に面会、遊撃隊護衛砲撃を懇願したが、肝心の小田原藩の内情が二転三転、遊撃隊は小田原藩官軍合同の攻撃によってもろくも敗退と聞き、急遽下船してひそかに箱根山上に至り、総大将林昌之助をはじめ残兵と共に熱海へ下り網代から安房館山に逃れた。この時最初二百五十名を数えた遊撃隊も僅か百十名となっていた。やがて勝太郎は江戸湾停泊中の幕府軍艦に再び乗船、榎本軍と共に函館に渡り五稜郭に拠ることになるのである。

五稜郭の決戦では血盟の友伊庭八郎を失ったが、やがて五稜郭開城と共に官軍に降り静岡藩お預けの処分となった。かくして多くの人々の血を流し、数々の悲劇を展開した戊辰の役もこれをもって幕を閉じたので

ある。このようにして生き残った人見勝太郎は名前も寧と改め、明治新政府の世を生きぬいてゆくこととなる。明治四年、同じく静岡藩に移住した御家人の娘鈴木すずと結婚、生来の才能を生かして静岡に学問所をひらき、庶民の教育に専念、学問所閉鎖ののちは私立英学校を創設、もちろん資金は徳川家が出資した。この当時静岡藩は移住して来た徳川家御家人数百人の生活を再建のために、茶畑の開発を進め、有名な清水次郎長こと山本長次郎もその義侠心をもってこの事業に協力したことは多くの人の知るところである。

人見寧はかつて勝海舟と掛りあったこともあり、彼の紹介で大久保利通にその才能を認められ、明治九年勸業寮に出仕することになった。しかも破格の奏任官七等であった。寧この時三十二歳、以後明治政府の官吏として生きてゆくのである。

明治十二年五月には茨城県大書記を経て、茨城県々令に任じ従五位に叙せられる。彼はこの間養蚕業の新興、利根運河の開削等の事業を成し遂げ、維新後の明

るい途をたどってゆく。そして明治十二年六月には久し振りに湯本早雲寺を訪れ、かつてこの地で繰りひろげた戦闘の思い出にふけり感無量の想いをしたに違いない。彼は此処に「遊撃隊戦死土之墓」を建てた。そこには静岡県土族人見寧と誌している。この碑は今も苔むして在りし日の箱根戦争の歴史を物語ってくれるのである。

人見寧は明治十八年茨城県々令を辞したのちは、在職中に手がけた利根川運輸(株)の社長となり、又、日本酒精製造(株)を興しその他多くの事業の経営に係わり、やがて栃木県校町に豪邸を構え、いわゆる立身出世街道を極めたのである。その没は大正十一年享年八十歳であった。

以上、戊辰箱根戦争遊撃隊の立役者三名のその後の生涯をたどって見たのだが、まことに三人三様、林忠嵩が言い遣したように琴になる者もあり、下駄になる者もあり、人の一生は図り知れない天命に従うままであることをつくづくと感じるのである。

関東大震災の 曾我山麓の被害

市川 一郎

本震災による被害は数多く伝えられているが、小田原近郊の土石流による最大の被害は片浦村(小田原市)根府川白糸川流域の土石流災害で、国鉄(JR)根府川駅では列車が海岸、海中に墜落し、根府川部落を押し流して埋没したことは広く知られている。

一 曾我山麓の被害状況

土石流の被害として、根府川に次ぐと思われる被害が、曾我村上曾我(小田原

市)字舞戸で発生し、竺土寺と下方に隣接した四戸が埋没した。

場所は曾我山麓で、東は国府津、松田断層の断崖崖面と思われる急峻な地形が足柄平野に接し、北と西は俗称舞戸川の扇状地と自然堤防に囲まれた所である。南が開けたU字形の所に竺土寺を除く四戸があり、自然堤防上の道路から四〜五m下がっていた。竺土寺は標高五八・九mの断崖崖の中腹にあり、他の四軒は標高



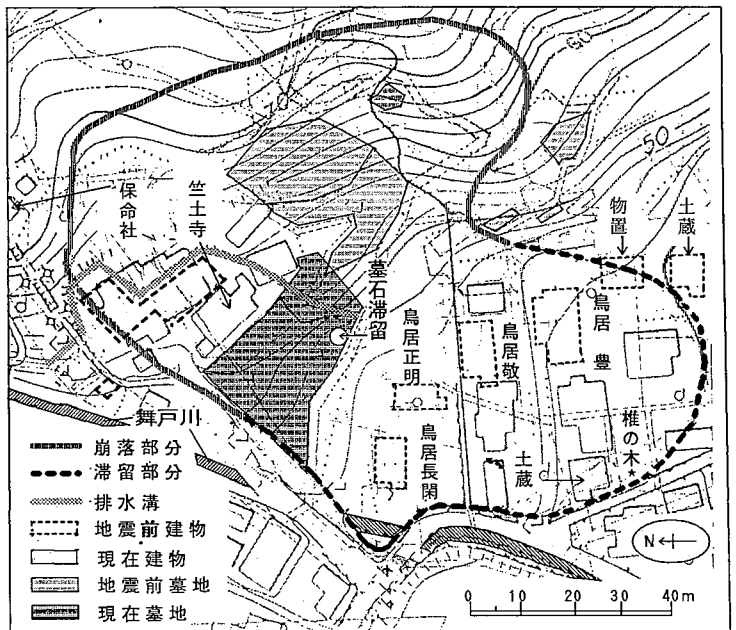
関東大震災舞戸崩落

四〇mぐらいの所にあった。崩落、滞留状況はいま、正しく知る由もないが、故人からの伝承、当時を知る人の古い記憶と現地を照合すると、崩落は竺土寺の上

標高七〇mあたりの山林からと、同寺の南上に続く道路工用の土取場からで、崩落した土石は竺土寺をなぎたおし、本堂を埋めて下り、現墓地の辺りにあった甘茶畑を崩壊して、土石流となって奔流した。

一方、土取場のほうは付近の山林、墓地を崩落し、前記と合流して平地に至り、その高さは最高五〜六mに達し、四戸の家屋を埋没、又は崩壊した。当時は土葬であったので、墓地の崩落で遺体や墓石が散乱して異状を呈した。昭和十九年に舞戸川から新墓地の下を約三〇m行ったところの道上、徳田家の墓地(舞戸震災関係図白抜きの辺り)から、墓石や台石が数十個も出土した。

鳥居豊方では土蔵が災害を免れ、震災後現在の場所に移動された。この土蔵の前面にある椎の木は、震災で上の山から流れて来て竹藪で止まり、当時直径五〜六



舞戸震災関係図

cmのものが、今では直径六・七〇cmになり根元で四本に分かれている。

人身被害としては、竺土寺、鳥居長閑方は無事故、鳥居正明方(当時木地挽き)一名、鳥居敬方八名、鳥居豊方四名の計十三人の死亡者があった。

二 救助作業

救助作業は、曾我村の消防団によって全部手作業で行われた。

九月十日までに鳥居正明

方で一名と、鳥居豊方で幼児を除く三名が発見されたが、鳥居敬方では一人もみつからなかった。

何分にも土石の量が多く、人力の限界になったので、九月十日で救助作業は打ち切られたが、敬、豊両家では、家族、親戚によって捜索が続けられた。十二月になって、敬家では全員同時に発見されたが、豊家では遂に発見できなかった。



催
し
もの



台宿恵比寿講市



こうだ門市

下曾我村及び近村被害表

部落数	震災 前の 戸数	全 壊						半 壊		埋 没	焼 失	人 身		
		戸数	全壊 率%	内			全 数	内 宮 寺	死 亡			重 傷	軽 傷	
				宮	寺	堂								
曾我谷津	87	77	89	1	2		10	1			17	12	6	
曾我岸	31	31	100	1		1					7			
曾我別所	130	118	91	1	1	1	12				9			
曾我原	67	62	93				5							
駅前	40	40	100								2			
田島村	135	110	81	1	3						8	2		
曾我村	479	306	64			6	166			5	2			

- 註 1 田島村の全壊戸数に、村役場、巡査駐在所、避病院各1戸を、曾我村の全壊戸数に公共建物1戸を含む。
 2 曾我村の全戸数不明につき全壊、半壊、埋没、焼失の合計とした。
 3 曾我谷津の半壊10戸の内8戸は「後」に(神保光定の話)、曾我別所の半壊12戸は「北台」(『下曾我田島村郷土誌』)に地盤の関係が集中している。

被害家族のその後

平成六年現在、鳥居長閑氏は近くに移転され、鳥居正明氏は消息不明であるが、他は屋敷内に移動して居住して居られる。

写真は筆者が撮影したものであるが、撮影位置は判然としない。図は小田原市の基本図二千五百分の一に加筆したものである。

三 曾我山麓の村々の被災状況

下曾我村と近村の被害状況を『下曾我村、田島村、郷土誌』から抜粋して表にした。

なお、本項は、笠工寺、鳥居豊両家の皆様、当地で地震を経験された鳥居誠象氏、特に豊家で被災された高橋シズエさん、その他の

越中おわら風の盆

駅前お城通り商店会主催



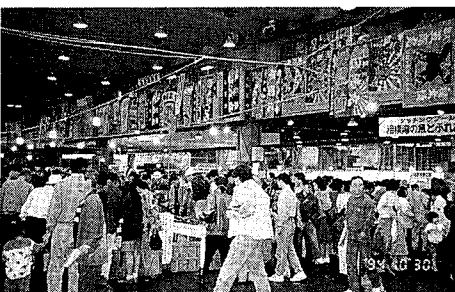
こうだ門市



ご協力によるので、厚くお礼を申し上げます。

さかなまつり

今年から会場を市民会館から小田原魚市場に移した



酒匂川の水害

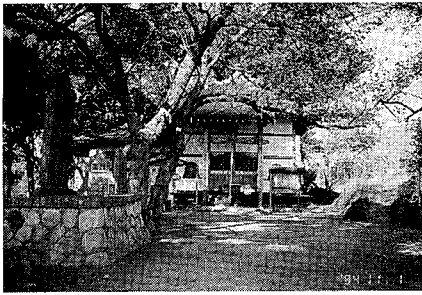
曾我保夫

酒匂川の水害といえは二宮金次郎さんを思い出しませう。

吉田島の九十間土手(お祖っさん)は水出の難所で、すぐに切れてしまう所でした。酒匂川の土手の記録によると、四十回も切れてい

るといわれています。九十間土手から続く曾比、栢山の土手もいつも切れては水下の農家の人々を苦しめていました。

お年寄の話によると、寛吉田島・九十間土手のおそっさん



政の大水で今の県立城北工業高校の東側あたりの土手が切れた時、二宮金次郎さんはまだ十二、三歳だったそうです。お父さんが病気で弱かったので、お父さんの代りに土手の仕事に出てよく働きました。

その頃土手に松苗を植えたが其の後も大水の度に押し流されてしまい、今は金次郎さん時代に植えた松の木は大口のお宮さん(福沢神社)前に四本あるのみで九十間土手から下には一本もありません。今ある土手の松の木は、明治四十三年八月の大水後に植えた松の木です。

明治四十年七月十八日の大水で曾比の控え土手が切れて水田が押し流されてしまいました。応急処置に竹の「シガラ」を造っただけの所へ又も八月二十三日に大雨が降り、前に押し流された所を又も押し流して水田の被害は倍以上になって

吉田島・九十間土手



しまいました。村の人達は水の引くのを待って、村総出で毎日毎日復旧工事に出て土手を造りました。被害場所は城北高校の裏側から栢山の駅前あたりがひどかったのです。

まだ水田の復旧が出来ないうち明治四十三年八月七日頃から降り始めた雨は、だんだんとひどい降りになり、八月十日狩川の生駒の堤防が決壊して生駒の玉伝寺の墓地や土蔵、観音堂などは全部流失してしまい、本堂だけは大雨の中を村中総出で本堂を東に引いたために助かりました。その時本堂の不動三尊の脇侍の制吒迦童子が流失したらしく、今お不動さんと矜羯羅童子が残って祀られています。

七日から降り続けている雨は益々ひどくなり酒匂川の濁流も増水して、ついに、八月十四日の夜、道上堤防が決壊してしまい、岡部賢治さん宅を始め曾我一統と中戸川さんなど計十四戸が押し流されてしまいました。女や子供達は必要品を持ってだけ持って一時お寺(善栄寺)に避難をさせました。大人達は一軒でも流失を食い止めるために懸命でした。

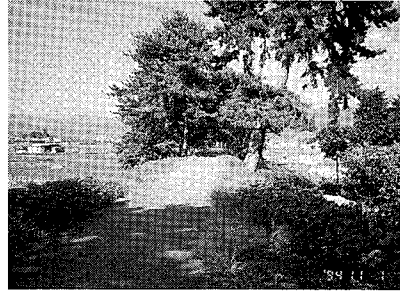
一夜明けて見ると、岡部さんの大櫓が根こそぎになって百メも流されて田の中に埋まってしまいました。私の家から下拾家の屋敷の形も無くなり四、五メも掘れて一面湖のようでしたが、十五日の夕方から雨も小降りになって水もだんだん引いてきました。田圃は一面に石ころだらけになってしまいました。

農家の人達は途方に暮れてただ困ったなといっただけで後の言葉はでなかったといえます。水下の中曾根、蓮正寺の人達は、家財道具が浮き流れて来るのを、ひろい上げて後日持って来てくれました。昔は屋号の焼印が押されたり書かれたりしてあるの

で、持主がわかりました。私の家でも蓮正寺に伯母さんが嫁いでいたので、これは家の栢山の物だと⑧の焼印をみてわかったそうです。

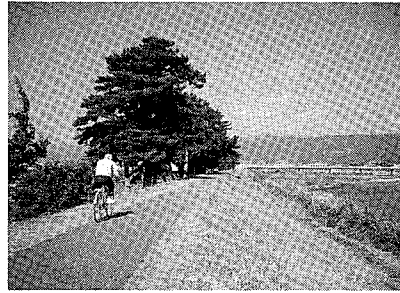
家を流失した家では、早速に栢山の村中に屋敷を求めて仮家を造り移転をしました。水田は翌年四十四年に耕地整理することに決まりましたが耕地整理も大変なことで丸三年もかかりまして、ようやく水田らしくなって来ましたが、なにしろ土がないので山の方面から馬や荷車で赤土を運びました。又雨降の時には濁り水を田に入て土を増やしました。栢山の農家の人は土を大切にしました。田圃で泥の手足を洗い落す時には必ず「みの口」で洗うこと「尻みの口」で洗うと土が外に流れ出てしまうから「尻みの口」で洗ってはいけないということです。土を大切にすることを沁みじみと感じます。祖先の人達は血のにじむような苦勞をしてきました。私達は決して忘れてはならないと思います。災害は忘れた頃にやってくる。

大正十二年九月一日の大地震(関東の大地震)の後二日の午後から降り出した



曾比の控え土手

雨がだんだんと強くなり三日の午前中まで降り続きました。



丹沢の山々は大地震のために山崩れが酷かったらしく、また雨も丹沢方面に多く降ったらしく、酒匂川の堤防には被害は無かったのですが、おどろいたことに酒匂川の中は一面に流木で川底の石が見えない程、山から木や土砂が押し流されて来ました。

山集めて地震で家が潰されたり傾いたりしているのに、早速掘立小屋やバラク小屋の材料に利用をしたようです。この時の大水は恵の大水であったと皆さんが言っていました。

川の濁流は、狩川の土手の至る所を決壊して被害を出しました。中でも塚原の駒千代橋ちよひのばしの上面側が一番酷かった。上流に掛けてあった板橋がながれて来て駒千代橋の橋脚にひっかかって濁流をせき止めたようになって川の両側の土手が切れて一面が大きな湖のようになり両側の家や田畑を押し流して、大きな被害を出したのです。その時の酒匂川は増水はしましたが、幸に被害はありませんでした。其の後も度々大雨や台風がありました。今日まで無事に過ぎて来ました。

川邊本家物語り(1)

かわ 川邊 たくし 昂

一 川邊氏の始まり

豊臣秀吉が天正十八年(一五六)小田原北条氏を降し奥州を平定して全国を略々統一した頃、江戸城に入った徳川家康には六人の男子がいた。信康・秀康(後の福井松平)・秀忠(後の二代将軍)・義直(後の尾張家)・頼宣(後の紀州家)・頼房

(後の水戸家)である。この五男頼宣の子に光貞(八代将軍吉宗の父)・頼純がいたが、側室の子に小島主膳正と云う者がいて頼宣に仕えていた。豊臣秀吉は全国を統一した力を海外にむけ文禄元年(一五六)三月遂に朝鮮出兵を開始した。こうした世情での文禄二年、小島主膳正に一人の男の子が生まれた。この子が小島清兵衛

衛家次であり、川邊家の開祖となる人である。慶長三年(一五六)秀吉没するや再び全国は騒然としたが、慶長五年の関ヶ原の戦いによって天下は徳川家康の手に移り、慶長八年江戸幕府が創設されてから徳川頼宣は紀州藩主となって紀州和歌山城に封ぜられた。この時、小島主膳正・清兵衛家次父子も紀州家の親藩として親藩領の一部川邊郡を所領した。川邊郡は高川

山県日高郡川邊町であり、居住した和歌山城大手門脇には当時のものである樹齢四百年の楠の木が当時の面影をとどめている。慶長十九年(一六四)十月の大坂冬の陣・元和元年(一六二)五月の大坂夏の陣には紀州家も戦に加わった。生れながら勇敢であった清兵衛家次は、成人して二十三歳であり勇ましく戦い武功をたてた。この戦いで豊臣家は滅亡した。翌元和二年四月、徳川家康は七十五

歳で逝去した。戦いも終り、三代将軍家光は諸法度を発令して寛永の幕府確立期の治政の中で、紀州家は御三家の一人として平穏な日を送り、小島清兵衛家次も藩の仕事や所領川邊郡の管理に精を出した。そして、知代を妻に迎えて長男出生、更に寛永十四年(一三七)正月次男清兵衛が誕生した。この次男が後の川邊家二代目となる。続いて三男小左衛門、そして長女クニが生まれたが、知代は

(了)

産後の日だちが悪く寛永十五年十一月二十三日三十九歳で他界してしまった。家次は残された四人の幼児を育てることに心を傾けた。

かくて、家次は平穩な十数年を送ったが慶安四年(一六五二)七月突如不幸が起った。家次五十九歳、次男家貞十五歳、長女クニ二十四歳の時である。江戸に於て由井正雪の幕府転覆計画が発覚し、所謂「慶安の変」が起った。これに紀州藩士がかかり合いがあると言われ、紀州藩政の主要な地位にあった清兵衛家次もその一端の責任を問われ罰をうけることとなり紀州藩から放逐されることとなった。そこで家次は、当時関東で信仰を集めていた大山寺(神奈川県伊勢原町大山)の知人を頼って、三男一女を伴って遙々旅を続け大山にきたのは夏の盛りの頃であった。

当時の関東では、江戸幕府の基礎も固まり、四代将軍徳川家綱・大老酒井忠勝の時代であり、江戸文化の花が開き始めていた。大山寺に入った清兵衛家次は先ず永住の地を探した。そして、武士として生きることを断念し、長男を出家させ

た。浄国法師がこれである。

そして永住地については、気候も温和であり酒匂川の渡しで賑わう東海道沿いの酒匂の地に着眼し、知人の伝手で父子四人で酒匂に移り住むこととなった。

この時家次は、転居の事情から小島の姓を改めることを決意し、紀州藩での所領の名をつけて「川邊」と名乗ることとした。これが川邊氏の始まりであり、川邊家の祖はこの清兵衛家次その人である。

二 川邊家草創期の発展

清兵衛家次が姓を川邊と改め酒匂村に居を構え農業を家業として生活を始めたのは慶安四年(一六五二)の秋の頃であった。当時の小田原は、大久保忠隣の改易後番城となった小田原城に寛永九年(一六三三)春日局の子稲葉丹後守正勝が城主となり、その子正則が治めていた時代であった。正則は三十五歳で老中に任ぜられ二十四年間に中央政界で活躍した人物である。

家次は二男一女と共に初めてする農業に精を出し曲りなりに生計を続け、先

づ長女クニを同村の山崎清七と結婚させた。そして、次男清兵衛(二十九歳)に嫁を迎え、川邊清兵衛家貞と名乗った。これが川邊家二代目であり、父家次十六歳の時であった。続いて三男小左衛門も分家した。

小田原城主稲葉正則は、寛永十年(一六三三)の大地震の被害から領内を復興させるために、先づ街づくりを行ない江戸開府によって利用者が増してきた東海道の宿場町として農村的景観からまとまった城下町につくり変え、更に寺院の再建にも力をつくした。特に寛永九年(一六三二)入生田に建立した紹太寺は一キロ四方に及ぶ広大なもので稲葉氏十一万石の威勢を天下に示したものとされる。しかし、この寺は幕末に失火により全焼した。

こうした中で、初代家次・二代家貞は嘗々と農業に励み、次第に耕地をひろげ、本家分家互に扶け合って川邊家の基礎を固めていった。然し、小田原藩は事業の拡大により年貢の増徴の必要にせまられ、万治元年(一六六〇)より三ヶ年に亘り全領地の検地を行なった。これ

が「万治の検地」である。

その頃の農業収穫高の配分は、年貢三四%・地主三四%・小作人三二%であったと云う。更に稲葉氏は、箱根用水工事に着手し江戸浅草の友野与衛門が中心となり湖尻峠の山腹に全長一・三四キロの疏水トンネルの工事を寛文十年(一六七〇)完成して約七千石増収になったと云う。幕府でも農地改革として延宝元年(一七二三)分地制限令が出されている。

川邊家二代清兵衛家貞に、寛文七年(一六六七)長男が生まれ、清兵衛と名のつた。これが三代目段右衛門貞次である。更に、次男太郎右衛門が生まれ、後に分家した。

かくて次第に安定してきた家運の中で、初代清兵衛家次は延宝二年(一七二二)四月四日この世を去った。享年八十二歳である。時に二代家貞三十八歳・妻三十一歳・長男三代貞次八歳であった。その墓地は川邊家の隣にある「光明山無量院大見寺」に決められた。この寺の大本山は浄土宗京都知恩院であり、天文三年(一五三三)見尊退堂上人によって建立された寺である。

天和元年(一六六一)將軍は

四代家綱となった。小田原藩では天和三年稲葉正則の家督を正通に譲ったが、その後三年にして稲葉正通は越後国高田に転封され、變つて幕府創業譜代の功臣大久保家が再び小田原に返り咲き、貞享三年(一六八六)老中大久保加賀守忠朝が下総佐倉から藩主として着任した。十萬三千石である。貞享二年には將軍家綱により初めて生類憐みの令が出されている。そして世は元禄時代の文化花咲く時代となり、元禄七年(一六九二)側用人柳沢吉保が老中格となり権勢をふるった。

その頃川邊三代貞次は妻をめとり、元禄九年長男慶貞が生まれた。これが四代目段右衛門慶貞である。続く次男善左衛門は長じて酒匂村で分家した。そして、三男忠蔵は長じて享保十五年(一七三〇)頃箱根芦の湯に別家して温泉宿をはじめた。これが今日の芦の湯紀の国屋の創立であり、屋号も初代家次の出身地から名づけられたものである。

浅野家の遺臣赤穂浪士が吉良義央を仇討した元禄十五年(一七〇〇)の時、街道沿いの川邊本家では二代家貞



材木屋綺談 その実

たかた・きくせん

野に散在するが大樹にお目にかかることは少ない。この樹は製材すると強い芳香を放ち、樹肌は艶のある黄色、しかも水漬(みづぬ)でも腐ることがないので、水槽、風

材木屋も杉、檜、松材は米のめしのように豊富に取り扱(か)うが榿(か)の木は滅多に手がけることがない。榿は山

「編集付記」
この「川邊家物語り」は、川邊家の分家筋に当たる川辺

翁六十六歳妻五十九歳、三代貞次三十六歳妻二十九歳、そして四代目となる慶貞は七歳、紀の国屋の祖忠蔵も未だ幼なかつた頃である。これら家族が冬の夜の団欒の時、夫々の思いで語り合ったことであろう。(続)

呂材には最適である。しかし今言ったように希少材なのでなかなか手に入らない。当地方で榿の大樹がたくさん生えているのは昔から松田町寒田神社の境内と言われ、二夕抱えもある見事な榿が十本以上も木立を為している。材木屋にとって

昂氏が、「川邊家の人々が子孫に語りつぐ素材に使用して欲しい」という念願のもとに書き残した私家本である。内容は、最初に系図と川邊家墓石銘集、それに川邊家歴代年表を添え、続いて年代を追った次の六つの項に分かれる。

- 1 川邊氏の始まり
- 2 川邊家草創期の発展
- 3 川邊家の苦難のとき

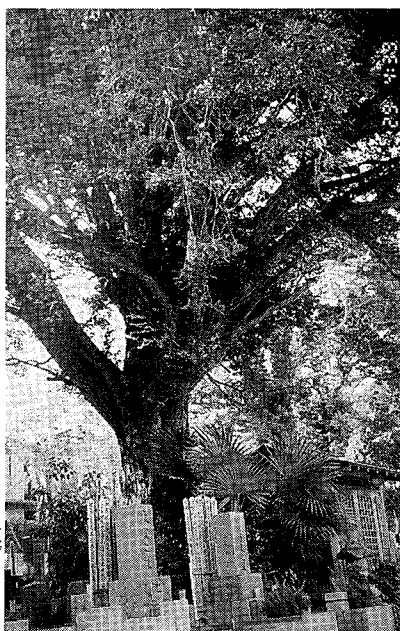
榿の木の話

榿(か)は垂涎(すいぜん)ものである。しかし神社の樹である枯死の兆候が見えたものしか伐採は出来ない。私は幸運にもその寒田神社の榿を伐採することが出来た。もちろん戦前の話である。榿の基盤(もと)は最高級品と聞いていたので、直径が六十

センチもある良材だからまず基盤を取ろうと製材した。基盤屋に言わせると、基盤はパチリと打った感触が手に柔らかく、打った跡が少し凹むのがよい。しかも翌朝にはその凹みが元に戻るのが最高と言う。材木屋にはそんな難しいことは判

- 4 川邊家の中興のとき
 - 5 川邊家栄光の五十年
 - 6 成功した漁業家川邊家
- 以上のうち、特に資料的な面から関心の寄せられるのは、十代目正之助家信が鱒大謀網で大成を収めた話を記した「成功した漁業家川邊家」の項である。中野敬次郎氏は『小田原近代百年史』に「鱒大尽豪墓誌」と題してそのあ

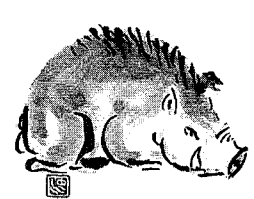
全部に丈夫な和紙を貼って一年以上日蔭で乾燥させねばならない。それでも思った以上に干割れが入り、難しいものだと思った。結局基盤は二面しか取れなかったが、いくらで売れたかは忘れてしまった。



伝聲寺境内の榿

小田原で榿(か)の木と言えは誰れでも思い起すのは天神山伝聲寺境内に在る榿大樹である。大正七年小田原に来た北原白秋はこの寺の境内に有名な「木兎の家」を作り此処でたくさんの童謡を作った。その中の一つかやの木山のかやの実はいつかこぼれて拾われてと詠われたのは木兎の家の傍に立つ榿の木をヒントにして作ったと言われる。その榿の木は今が無いが、二代目がすでに大木となっていて、見る人に白秋を想起させるのである。

らましと記している。なお、執筆者川邊昂氏(故人)は「確かな史実に推察を加えて取りまとめた」というだけに、その時代出来事を背景として取り入れて、全編の物語をふくよかなものとして



孝行者藤右衛門尚清 (1)

石綿勉

一 はじめに

板橋地区に、後北條氏時代から「京紺屋」という染物屋があった。代々「藤兵衛」を名のり、相模・伊豆地方の紺屋頭を務めてきた。尚清は八代藤兵衛で、嫡男の「藤兵衛」世襲に伴って藤右衛門と称した。

尚清は孝行者として、安永元年(一七七三)領主・大久保忠頼より表彰を受けている。この表彰内容は、官刻孝義録に記載されて今に伝えられている。この内容を紹介し、背景にある尚清や為政者の思いに接近していきたい。

官刻孝義録は、幕府が昌平坂学問所の官版として、享和元年(一八〇一)に刊行された。寛政改革に役立てる

目的で、国民教科の資料として編集された。全国の孝子忠義者など篤行者を調査して、その行状を顕賞し公表したものである。

全五十巻で、小田原藩関係者は第四巻に収録されている。町田村の林佐太郎と共に、「孝行者藤右衛門」の行状の掲載がある。

(国会図書館蔵)

二 孝義録の内容(意訳)

孝行者藤右衛門

藤右衛門は足柄下郡板橋

村の百姓である。

父藤兵衛は京紺

屋で明和八年に

病で死に、母も

同じ六年に亡く

なった。

母が世にあって

た時はねんごろ

に介抱し、年老

いて歯がなくなれば、食事は軟らかなるものを調理させてさしあげた。

小田原に出る用事があれば、菓子など求めて帰った。

わざわざ求めたといえは

「小遣いを使わせた」ように

に思われるので図り難く、

「今日はだれの人ののもとに

行ってもらった」などと言

い聞かせた。

母は茶を好んだ。毎朝お

そく起きて、囲炉裏のかた

わりに座るのを見ると、藤

右衛門は仕事が忙しくても

その側に行つて、母に茶を

入れてあげた。時には望ん

で母と共に茶を飲みながら

のどやかに談話した。

夏は涼しい所に母を連れ

出し、夫婦で蚊を追ひ払っ

てあげた。

母が床に入つても、寝つ

き悪い時は、寝入るまで物

語りした。母の病ある時は、

夜具の中に添寝して明かし

た。

病で亡くなった時も、藤

右衛門の膝の上で息絶えた

程だった。

母はかねて剃髪したいと

言っていたが、今しばしと

答え、思いとどまるよう諭

した。村人が「どうして母

いのか」問いかけるので、「母の望みに任すのはいと易しいけれど、生まれつき物がたき性格なので、髪を切りおとしたならば、きつ

と魚の類は食べないで、常に精進していると思う。老

いたる身なので、気血も薄

く衰えてしまうことが心配

で、承諾を一日一日と言

のばし、そのまゝにしてお

いた」を答えた。遂に剃髪

して、名を妙遠と改めた。

母が風呂に入る時は、自

ら湯のぐあいを見たり、垢

すりなどして、人の手をか

りることがなかった。

藤右衛門の若い時から酒

を好みしを、母は常に「酒

を飲んでも、あながちにあ

やまちな事はしていないけ

れど、家業のためにはよく

ない」と言っていた。母の

心を悩ませることを憂え、

五十一歳の時より酒を絶っ

て、今に飲むことはない。

先のとし、百姓代という

役を務めた時は、村のうち

の者が集まる事があると、

たとい人の親だというとも

老いたる者を敬うべき旨を

常に教え諭した。人びとも

その道理に心服した。

されどこの役を務めれば

仕事が増しくなり、母の介

抱は疎かになるので、子の藤兵衛に役を譲って、己は家の仕事をいとなみ、母にのみ任せた。

母が亡くなった後は、每

朝寅の刻(午前四時前後)

に起きて、先祖厚恩母菩提

のためと高らかに唱え、法

華の題目を念じた。はじめ

た時は「となりの人の耳を

驚かしていかか」と咎める

人もいたが、年へても怠ら

ないので、人びともその志

を感じとった。

夜があげれば、旦那寺の

蓮正寺に行つて、家で唱え

る声よりもひとときわ高ら

かに、題目を唱える事を常と

した。

藤右衛門の母までは、三

代女の子に聳とりて家業を

継いできたが、藤右衛門の

代に至つて兄弟もあり、男

子もあって相続できること

は、偏に先祖の厚き恵みな

りとの思いで暮している。

母が常に言っていた「世

の中の人に、日の光の恵み

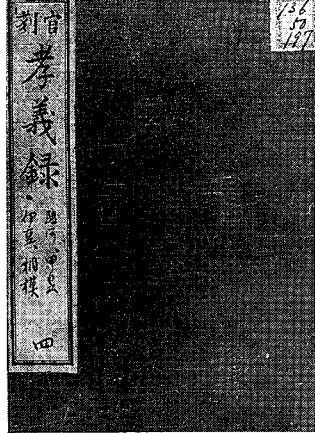
を受けぬ者がいる。日の出

の先に起きて、よろずの仕

事をなすべし」ことを道理

と思つて、若い時より家に

いても旅にいても、夜明け



孝義録の表紙(意訳)

ているが、半分は日の恵み
深しと思うと、殊更に日を
拝し題目を唱えた。

安永元年二月、領主より
褒美として、田畑の高五石
一斗二升あまり生涯免除を
受けた。

以上が全文であるが、一
部に津田家の位牌や系図と
違う内容を含んでいるので、
その見解を提示したい。

その一 紺屋の開業者に
孝義録の終末部分に「父
違いがみられる。

の時より紺屋の職をしてい
る」とあって、父が紺屋職
を始めたことになる。

系図をみると、初代正朝
に「文安三丙寅年(一四四〇)
四月板橋村へ来り紺屋職相
始候初祖也」と添え書きさ
れてある。孝義録登場の父
は、紺屋職七代目になって
いる。

その二 職業に違いがあ
る。

孝義録は、冒頭に藤右衛
門は「板橋村の百姓」と掲
げている。前述の「父の時

より紺屋の職」と矛盾した
百姓である。

藤右衛門の戒名は「京屋
院決染居士」で、紺屋職で
の活動歴を物語っている。
系図上でも、その後代々
「紺屋職以相勤候」とあり、
昭和四十九年ご逝去の十六
代当主(津田泰三)も、紺
屋職を続けていた。

藤右衛門表彰時の「田畑
の高五石一斗二升あまり」
の農業生産は、副業と理解
しなければ、「京紺屋」が
生きてこない。

その三 藤右衛門の父母
の死亡時期に違いがみられ
る。

孝義録は「父藤右衛門は……
明和八年(一七二一)に病で死
に、母も同じ六年(一七一九)
に亡くなった」ことを示し
ている。

津田家の位牌は「七・享
保十八癸丑(一七三三)六月二
日。同宝曆十一辛巳(一七六一)
四月二日」となっている。

系図でも、父は「七代尚康
藤兵衛、享保十八癸丑六月
二日卒ス」とあり、母も
「妻宝曆十一辛巳年四月二
日卒ス行年八十五歳」であ
る。

孝義録でいう死亡時期に、
父三十八年、母八年の差が
あり、いずれも位牌より遅
く亡くなっている。

その四 父母の生死が逆
である。

孝義録では、母は父より
2年前に死亡している。位
牌や系図では、母は父の死
の28年後に死亡で、長寿を
示している。

孝義録では、母生存中に
父も存命となっている。け
れど父とのふれあいの記事
が全くみられない。

系図上の年号と年令を遡
及すると、藤右衛門は三十
一歳時に父を、五十九歳時
に母を亡くしている。

なお文中の「蓮正寺」と
は、今の御塔生福寺(板橋
三)である。

その縁起によれば、東海
道筋のお塔坂に「妙福寺」
が古来からあった。明治末
年に箱根登山鉄道の敷設・
国道一号線の拡張により、
境内地を削られ、現在地に
あった蓮正寺へ合併・移転
することになった。大正二
年に庫裡の落慶式を挙行し、
「御塔生福寺」と改称した
ことを伝えている。(続)

過小田原城在感

山城人去後

索寞十余年

古堞唯霜氣

殘蟾一片懸

小田原図書館に成島柳北
の「過小田原城在感」
と題する五言絶句を書いた
掛軸がある。

山城人去って後

索寞十余年

古堞唯霜氣

殘蟾一片に懸る

(掛古堞 古いひめがき)

城壁の上に建てめぐら
した小さな垣。
(掛残蟾 月かけ)

住時の栄華を知る者にとっ
ては、惻々と胸に迫る思い
のする詩である。

成島城北は幕末から明治
にかけて、学者・文人とし
て著名な人であるから、こ
の掛軸は小田原にとってな

かなか好い郷土資料だと思っ
ていたら、明治二十年頃出
版された『箱根草』という
本の末尾の「相模名勝集」
の中にまったく同じ詩が載っ
ていた。

そして、作者は小栗松齋
と記されているのである。
この詩は、成島か小栗のど
ちらか未だ分明でない。
(石井富之助)

遺稿

露国・日露の役俘虜のこと

八十七年ぶりのお礼前編(八)

隠岐威重

今度の敗戦で生まれたシベリアの捕虜の話、それは嫌と云う程聞かされている。ごく最近のソ連の大崩れ現象、マルクス・エンゲルスの大思想も、レーニンの業績も大きく否定されるかも知れぬ。その良い方のトバッチリで懸案の北方領土も、捕虜問題も前進するかも知れぬ。好転することは良いことだ。

だが、あの時、何故あんな酷な取り扱いはしたのか、その動機の解明にはならぬがそれが知りたいのだ。南満に居た老人でも、あの地は非常に寒い、零下三十度になることも経験している。まして北のシベリア、穀の備えない地、前にもくどくど書いたが、その寒冷の地は何も食べる物も、豊かさも無い処なのだ。まして露国出身トコトン対独戦で疲弊した時期、自国民でも食うのがやっとだった。

捕虜にまわす食料の余裕もなかったろう。事実廻らなかつた。一方の黒パン、顔が映る雑穀の汁、その飢えの中で野外の力仕事だ。死なない方がどうかしている。それも一年や二年ではない、数年、中には十年近くも捕われの生活。唯働くだけではない、慣れぬ思想の締め付け、内部告発、嫌な事だらけだ。御苦労様としか云いようがない。俺だつて一歩間違えば同じ境遇になったかも知れぬ。人ごとではない。

では、何故ソ連はそんな愚行をしたのだらう。他の連合軍はそんな馬鹿な事は一切しなかつた。ヤルタでルーズベルト・チャーチル・スターリン・米英露の親分連が戦後の日本の処理の打ち合せをした。大体この打ち合せ通りの結果になった。だが、そこには捕虜の取り扱い迄は決めていなかった。

当たり前だ。ジュネーブ条約。ハーグの万国平和会議に定められた捕虜条約がある。国の為に戦い、捕われた者達は博愛の精神で扱ふと定めた条約である。それは万国承知の条約であり、第一次大戦でも十分その機能を発揮している。

では、何故ソ連はそんな愚行をしたのだらうか、ともう一度問いたくなる。スターリンのヒステリーが一時的に爆発して発案し、それを実施させたのか、いや違つた。ここまで長々と露国の発生の歴史を記して来た。ロシヤのロシヤ人の本質とは何かと。そんな大問題はこんな小さな話の中で決して語り尽くせぬ事は勿論知っている。

いや、もっと根深い処にある事も知っている。だが、大まかで、粗雑なものでもいい、一寸でも本質に近づく事が出来れば、と。

老人は、どうも中学時代の歴史の不勉強から、ロシヤとは、千年も前から白鳥の湖が舞われていた優雅な香り高い文化を持った国だと思ひ込んでいた。それが、実は、五百年前まではジン

ギスカンの末裔に首根っ子を押し付けられ、ヒイヒイ泣いていた国だったのだ。それ程不勉強だったのだ。

現代のソ連、露国が大国として華々しく後光がさしていたので、つい、彼の国の背後が良く見えなかつたのかも知れぬ。たつた、五百年足らずの国と、まして社会主義に改宗してからも僅か七十年しかならぬ事も。

その後光の輝きも、此処に来て急にメッキがバラバラ剥け落ちている現代だが。そんな時だからこそ、より問題の本質を知る必要がある、と、露国の、本質はこんなことでそう簡単にかわりはしないと信じ、驚馬に拍車を入れなおしてもう少し進もう。

十八世紀の始め、ナポレオンがモスクワで冬將軍に破れた。それを追ってパリに入城したロシヤ貴族の青年将校達はロシヤの体制遅れを痛感した。

共和制に移る前のフランスであっても人民の力の強い事を知った。

ここで少し、当時の露国を見よう。

人口は六千五百万、貴族は一%、都市人口五%他約

九十五%は農民、農民中の大半は地主の財産同様の農奴だ。彼等は地主に年貢と労働を支払う家畜のような存在なのだ。その制度が露国の地には深く染み付いている。勿論、憲法も議会もない。ツァーリの思いのままの独裁が行なわれていたのだ。そのツァーリ(皇帝)をスターリンと読みかえてみれば半分ほどあの愚行が分かるだろう。

独ソ側の被害は二千余万人だったとか。終戦の翌年は大凶作だった。また大戦中におおきな援助の手を延べた米国トルーマンは、戦後のソ連の態度に不信を抱き、援助の途を閉ざしはじめた。

背に腹はかえられぬ。僅か旬日の満洲での戦いで六十四万人の捕虜、莫大な在満工業施設等々大儲けの大戦果を得たのだ。

日露の役、革命初期のシベリア出兵の仇を返せと、六十余万の捕虜を北に連れ去り、死ぬほど辛い労役に使つたのだ。勿論ジュネーブのハーグの捕虜に関する条約は知っていたらう。腹黒いスターリンのこと天地が引つ繰り返るこの混乱の

中、他人の面倒をみていれば己れが死ぬばかり、奇麗事を云っていられるか、と捕虜の酷使にはげんだのだ。当たらずとも、遠くはあ
るまい。

露人の心

一 民族の大移動

……タタールのくびき
繰り返しになるが、もう一回露人の心情を老人なりに整理してみよう。

欧州大陸には民族の大移動があった。北の森林に住む民族が南に太陽を求めて移動した。その波は歴史の上で幾回もあった。キリスト世紀前にもケルトと云われた森林の民が南に下り、ローマの軍勢と戦う移動がある。その前にもあったと云うが詳らかでない。

そのケルト族の一岐枝の族は現存する。フランスの北部ブルタニューに。英国大ブリテン島の北部西南のウエルズに、その隣の島アイルランドにも。現フランス人もそのケルト族とイタリヤから北上したラテン系との混血とか聞く。
その森の民達、^{はくま}白皙の肌、金髪を振り乱し、顔に墨で

彩る筋骨たくましい勇猛な人達とか。個として、小集団としては猛勇を奮う戦士だが大集団を嫌い、北上するローマの軍団に破れ、散じて混血していった。現在でも僻地に僅かに純な姿で残るとか。そんな移動の姿、北の冷酷な森から南の豊かな太陽を求めめる動きは続いたようだ。

ウラルの西側の森原に住む一族・原ロシア人も一時、すぐ南の黒土が造る豊かな平原に出て土を起し、草を植え、農を営み衆が集まり国としての原型が芽生え出した。

十世紀のころか。当時は、遊牧と云う、生産生活手段の最盛期の頃だ。馬を馳せ、豪弓を絞る遊牧の民は当時世界最強の軍団だった。

その黒土の平原に出て農を営み、国創りの芽を出した原ロシア人の上を、オリエント地方から北上し黒海周辺で放牧を営む族、遠くモンゴル高原、その豊かな草地に生まれた種族が織り成すようにロシア平原を襲った。遂にはその地に居座って、酷使、酷税、の限りを尽くした。「タタールのくびき」と後世称される

酷政で三百年近くも虐げられた。

そんな被害民族、原スラブの民の心情には深く、暗い影が生じ、他を信じぬ猜疑心を根付けていった。一方ほんの僅かの平和な時がある、今までの憂を散じ突発的な野放図な楽天性を爆発させ、大騒ぎを演ずる特性をも与えた。

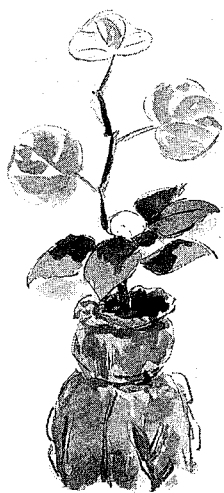
老人も、内地での経験だが、これに似た現象を見た、昭和中頃、中央都市の工業力が繁栄拡大し、地方僻地に低賃金の労働力を求め拡散した頃だ。ニクソン・ショックとか、昭和中期の第一次の不況が世を蔽った。地方進出工場は合理化、倭約の極まで身を縮めその大波を防いだ。老人の居た工場も内地では大僻地、秋田八郎潟の近くナマハゲを産する東北の地にあった。工場の掲示板には鹹首計画が貼りだされ、その隣には労組の反対ビラ、赤旗が林立していた。だが、平常の工場は静かだ。従業員達は黙々と働く、跳ね上がりは鹹首に通ずると知ってか普段に増して働く。都会に比べれば半分の低賃金だが、この東北の地では、東京から来た

最先端技術の職を失えば他に変わる場もない。唯耐えて、うつむいて、黙々と働いている。出先管理者の老人は、その矛盾は知っていたがなす術もない。これも唯黙すのみ。老人も単身赴任で一人、工員の独身寮に居た。浴槽で会う裸の姿にも平常の微笑はあるが多くの視線を外し不安と不満を表した。別に手荒なことはなかったが。

だが、給料支給の夜だけは別だった。早寝の老人が床に就く時刻に寮に底鳴りが響く。ワーゴーパータパタドタバタ、地鳴り、床鳴り、悲鳴、怒号、一晩中続く。本当に飽きもせず。日頃の不満、不安、のやるせなさ、一晩中爆発し燃え続けるのだ。一番困るのは低く細く、寂しげな少女の泣き声のような、音が床を這い、

老人の耳を襲う。誰が、何処で、何故、そんな哀れな音を発するのか、判らぬ。その音が耳に絡みつく。もう寝られない。床の上に座し、ウイスキーをなめ、腕を組み、その音に聞き入る。この日本海の風が運ぶ砂丘に生える松林の中にある寮。その寮全体が北風に、北の不運の魂の泣き声に共振、共鳴して震える。これが北の声、北の魂の叫びかと……。いやにセンチに、湿っぽくなってしまったが、実はもっと雄々しい馬鹿騒ぎなのだが筆力不足で写しきれないのだ。露人のバラライカを奏でる陽気なコザック踊りの発散風景でも想像願う。北の憂鬱と底抜けの突発的発散は、たとえ日本海と云う海を隔てても、同形だなど思っていた。

(続)



カット・隠岐威重

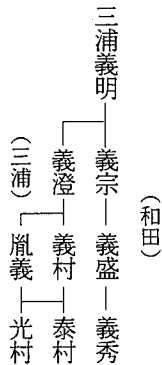
和田義盛の墓供養

西山 銈太郎

一 和田義盛

小田原市東大友地区ひがしおとよ内に、昔から和田屋敷と呼ばれる水田があり、その地に和田義盛の墓地と伝えられる墓がある。今は大部分が畑や建設会社の材料置場となっている。

和田義盛は、西大友の郷土史研究家古宮萬寿夫氏著、『東大友・西大友・延清郷土史』に詳しいので省略するとして、三浦郡和田に住したのと和田を姓としたと云われる。



義盛はなか／＼の豪の者で実力者だった。北條氏は幕府の実権を一手に握ろうとして陰謀に依り有力な幕臣を次々に滅して行った。義盛もいつしかその魔手にかゝり、一族の三浦義村と謀り北條氏を討とうとしたが、あれ程かたく約束した義村は、本家と分家の離間策にのせられ、決起の直前になって裏切った為義盛(67歳)一族は建保元年(三三三)全滅した。義盛の一子義秀も戦死した。義秀は、木曾義仲(31歳)が近江

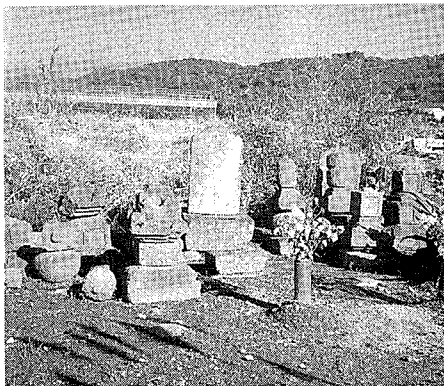
の粟津で元暦元年(二八四)戦死をした時、その妾で女傑として知られる巴御前は捕えられて、

鎌倉へ連れて来られた。女ながらもその豪勇振りを惜しんだ義盛は頼朝に請い、下げ渡された。そして巴御前の生んだ義盛の子が希代の豪傑義秀で、朝比奈三郎義秀と云い、その豪勇振りも物凄かったが遂に戦死をした。

二 和田墓地の供養

和田墓地の前に東大友部落が村内安全を願っての弁天さんが祭ってある。よく同部落の西山茂氏に会うが、部落の人々は熱心に清掃され、季節の花の絶える事がない。私はよく運動の節弁天さん前のミニ公園迄足を

和田一族の墓



(左) 小林さん・(右) 内田さん

のばし、そのベンチで一息入れて帰る。

弁天さんと和田墓地とは道路と、酒匂川から取水した灌漑用水路酒匂堰から更に分水した和田堰が流れている。和田墓地には多くの塔の中に、享保四年(一七一九)建碑の板状の碑が二基ある。何れも施主は永塚村の宇佐美八右衛門で名主だったとか。

本年三月の事であった。私は例の如くミニ公園で少憩の後、その裏の和田墓地へ出ると、二人の婦人が清掃した墓前に花・香・供物等を供えて、般若心経を唱えてた。私は立ちたま／＼手を合わせてその読経に静かに和してた。終ったら弁天さんの前に至り同じ事をした。

私は此の供養の事について知りたかったので、弁天さんの前の奠座ごぞうに誘われるまゝに座って種々話を聞いた。

戦前は永塚の宇佐美家で代々供養を行って来たが、戦後世相の変わっ

た事と、和田屋敷の所有者が昔と変わって関係等で、今は殆ど忘れられようとしていた。此の二人の婦人東大友の小林友子さん・内田文枝さんは、十七年前から毎月大体月末に近い日に供養を続けて来た。私達も老齢なので是非若い方々の仲間を欲しいとの事だった。また話の末に、もう一人西山フキさんが居たが七年前に亡くなられた、と云う。西山フキさんは私の小学校時代の同級生だった。

三 戦後の歴史

戦後平和が続く歴史の研究が盛んになり、それが専門家だけではなく、素人の歴史愛好者も多く、各地に史談会等が生まれて興味を持ち、素人は素人なりに研究をし、又郷土の史跡を調査してこれを保存しようとの気運が高まった事は誠に結構な事だと思ふ。しかし、反面古い事、古い物、古い遺跡等、現在の役にたかない物は、総べて抹殺してしまう等の事が行はれる事もあり、大変残念に思ふ。温故知新、古い事を知ってこそ新しい事を知る事が出来るのである。古いものがなければ新しい物は生まれない。古い人間から新しい生命は生まれるのである。

最近内田さんが少々健康を害された様であるが、早く健康体に復し、和田供養をお続け下さる事を願って居る次第である。

虜 愁 記 ⑤

シベリアから祖国に祈る

藤野 明

イルクーツクのシャワーから

ラーダ収容所へ

いわれなき抑留をされて連行はどこまで続くのだろうか……。

西へ、西へと、シベリアの膨大荒漠な地。鉄道線路(広軌)野原を走る。

暗闇のため時間もはつきりしないが多分一時過ぎぐらいだと思われる頃、バイカル湖畔を緩りと廻り、大きな駅についた。

イルクーツク駅。だと伝達された。駅の貨物線路は広く静かで、貨車は暗闇の線路の外れへ止まった。

寒い。十一月十日頃であつたらうか。

貨車から降ろされた一回目の二〇〇人が駅の大浴場へ行くことになった。

汚いタオルを下げて防寒外套に身を包み、寒い駅構内の暗い線路を何本も越して行く。

る事が出来るものであろうか。国家的施設として、シベリア縦走長途の旅行者が唯一の疲労をとり寛ぎをする場所であらう。

久方振りに我々は、日本人らしい顔に還る事が出来て、嬉しかった。

そして、シャワーが終わった時、前に出した被服類は蒸し消毒され返された。それは、かつて発疹チフスで苦しんだソ連のシラミ絶滅法であるという。

シャワーのお湯で身体は暖まり、被服類も蒸し消毒により暖かく、寒いはずの風も肌にはひやり心地よく感じた。

さて、夜半の貨車は、ゆるりと北西を向き、そして西へ西へと、ひたすら走り続けた。

牡丹江から出発して二十日目の十二月一日夜、小さな暗い駅に着いた。

電柱に灯はなく暗い道を蜿蜒と列をなして、約一時間ほど歩くと、暗い部落についた。

ここが我々の住舎となる洞窟のラーダ収容所であつた。

長途の垢を落としに二〇

人づつ風呂場へ行く。

風呂場は広いが古い。床板が敷かれているが、風呂桶はなく、隅の大きな台の上で大釜が四、五個あり、お湯がわいている。中央には大柱があり、ランプが掛かっているが暗い。

釜のところで、あご髭と胸毛の濃い二人の大男が日本人通訳と何か話している。どうも古株のドイツ人？捕虜らしい。

木の桶が十四個ぐらいある。何とか手に入れ、友達と共にとりあえず、お湯で体を流す。急いで石けんで体を洗い、お湯を貰いに桶を持って釜の所へ行く。

ところが、ドイツ人？はお湯をくれない。日本語とドイツ語？で喧嘩しながら話すが通じない。通訳によると、どうやら身体が濡れているのと、タオルを持っているので、もう体を洗ったものと思われたようだ。だが、お湯をくれないのでどうする事も出来ない。

私を含め六人が石けんを流せないままだが、次々と順番の人達が来るので仕方なく、ムツとするだけだつた。

大乾燥室へ行く、脱いだ

被服類が大きな環に掛け並べられている。ドイツ人？二人から無愛想に手渡される。被服は、熱気消毒され手で触れない程熱くなっている。身体は石けんを流せない儘こわばっているがそのまま被服類を身に着けざるを得なかった。

この後、お湯にありつくことが出来たのは、一カ月位たったのことだった。

北欧の厳寒は、未だまだである。洞窟はかび臭く、板や丸太のいたる所に蚤と南京虫がはびこり、我々を一睡もさせてくれなかった。「ヤポンスキー、ノミ、イエス？」(日本人ノミあるかな)と、時々、医務の中尉と看護婦がシャツを検査に来る。

牌はナラ材で作ったもので、数卓あり、暗い所で麻雀をジャラジャラと一生懸命やっている。検査がくると直ぐ隠す。皆んな並んで整列する事になる。(続)



古文書講座 10

炭屋七兵衛の約定手形

内田 清

の氏神」となつて成功する可能性を持つ事業だったわけです。史料不足でその辺を明らかに出来ないのが残念です。

生土村との炭焼き約定

小田原宿の炭屋七兵衛が宝永四年(一七五七)に生土村(小山町)へ差し出した文書(室伏寛氏蔵)では次のように約定されました。

- ①杉・松はきらない。②先年のように村から願書を出してもらい、商人が表面に出ない。③商品流通税である十分の一銭は商人が負担する。
- ④三年間分の原木代が三十七兩余、幕末期に比べると随分安い。そして二割り程が、山半、すなわち事業の中間での支払いである。⑤炭運搬では駄賃馬についての地元利益優先を認めながらも特例措置を盛り込んでいます。

山師七兵衛、金も掘る

約定書のようにして、生土村で炭焼きをしようとした七兵衛とはどんな人物でしょうか。②の文面から、宝永四年以前にここで炭焼きをしていたと考えられます。しかし今回は、この年十一月の富士山噴火の降砂にこの村も埋まるので、計画どおり炭焼きが出来れば、被災者救済の「時

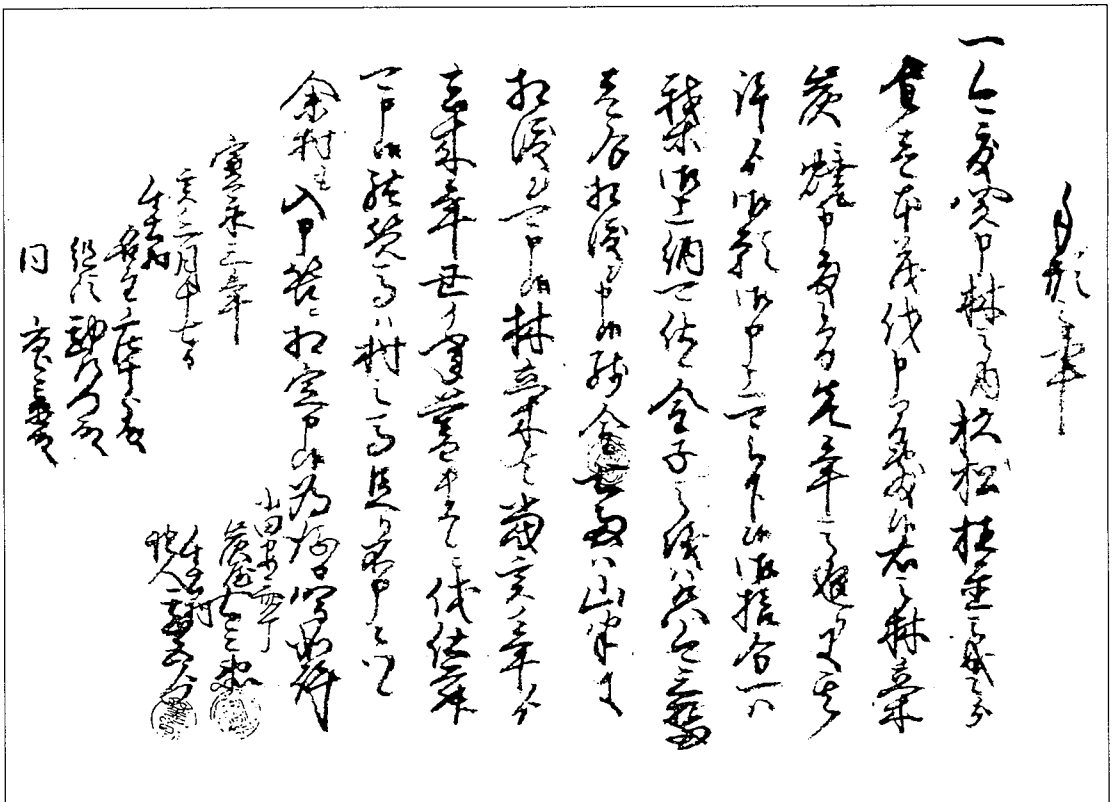
炭屋七兵衛は、享保十二年(一七三七)に仙石原村公時石ほかで金山採掘をしました。勝又栄治家文書によると、役人の検分を受けたり、死者を長安寺に葬ったりしています。

彼は、商人と言うよりも企業家・山師だったようです。私は金太郎伝説との関係でも以前から彼に注目していました。『小山町史』で、彼が小田原安斎丁(南町)の住人と知って一層興味を持ちました。

炭商売と燃料革命

金時山南面、文化十二年(一八二五)に桑木村(小山町)が、小田原高梨町(浜町)・藤五郎・山王原村(東町)平蔵と船による炭運送の契約を結びます。六年間に年四万俵宛です。小田原と沼津から船積し江戸本所御蔵地内御炭会所まで送ったのです(『小山町史』2)。資金四八〇〇両を借りた桑木村は、やがて炭での村起こしに失敗して借金や自然破壊に苦しめられます。

とわいえ、三百年前に、世界第一の消費都市江戸の燃料に注目して、薪から炭への燃料革命を推進した炭



屋七兵衛や、その波に乗りそこねた村の歴史があったことをさらに解明したいものです。

注意して欲しい語句

A 後焼申度候

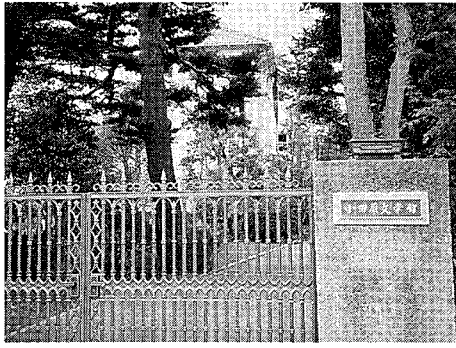
すみにやきもうしたくそうろうあいだ二が下の字に着いたり、間の門がまえがつまって上に上がったります

B 写巻

よつてくだんのごとし 慣用句ですが、仍が横伸びし、而がつまって一文字のように見えるわけです。

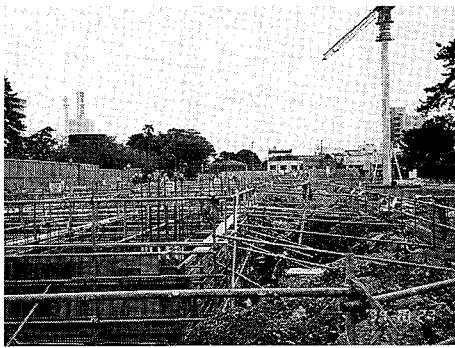
C 御願御申上可被下候

かんざえもんどの・いちろべえどの左衛門・右衛門では衛が略されています。甚五右衛門の右が()であることも注意しないと、甚五郎と誤読します。右と左もこの場合はともかく迷うことがあります。また市良(ら・ろ)兵衛なども慣用ですので、なぞってみて体得してください。



県下3番目の小田原文学館

小田原市立文学館が、去る十一月二十三日、谷崎潤一郎、佐藤春夫、岸田国士らが住んだ西海子通りに面した、南町二丁目三番に、県立近代文学館、鎌倉文学館につぐ県内三番目の文学館として開館。一階の展示



完成予定は平成7年12月28日

新築工事中の三の丸小学校

室には、北村透谷、牧野信一、尾崎一雄、川崎長太郎ら小田原出身の、二階には小田原にゆかりの文学者の、原稿、書籍などの資料を飾る。

『北村透谷没後100年』展

市立かもめ図書館開館に際して、去る11月3日(木)から13日(日)にかけて透谷没後百年展と11月5日(土)に記念講演が開かれた。

小田原に生まれた近代文学の先駆者透谷の生涯を今再びたどる

土岐運来

北村透谷没後100年展

小田原市立かもめ図書館開館記念

11/3(木) - 11/13(日)

9:00-16:30 11月7日休館

会場 小田原市立かもめ図書館

北村透谷没後100年記念事業

記念講演 『透谷と近代』 小田原文学散歩

講師 吉本 隆明 氏 講師 内田 四郎 氏

11月5日(土) 14:00-16:00 11月12日(日) 16:00-17:00

申込みはかもめ図書館まで、申し込みの受付は、かもめ図書館まで、申し込みの受付は、かもめ図書館まで

小田原市立図書館 / 小田原市立かもめ図書館

手形之事

一 今度買申林之内、杉・松植置被成候分

者 炭本茂伐申間敷候。右之林立木

A 炭焼申度候間、先年之通りに、其

許より御願御申上可被下候。御拾分一ハ

我等御上納可仕候。金子之儀ハ、只今三拾両

者 壹分相渡申候。残金七両ハ山半に

相渡可申候。林立木当亥ノ年より

去来年丑ノ年暮まで二伐仕舞

可申候。駄賃馬ハ、村之馬足リ不申候ハ、

余村も入申等相定申候。為後日仍而如件

宝永三年 亥ノ二月十七日

小田(原)安齋丁 炭屋 七兵衛印

生土村 庄十郎殿 証人 甚五右衛門印

名主 庄十郎殿

組頭 勘左衛門殿

同 市郎兵衛殿

古墳遍歴 (十五)

知られざる皇陵 (九)

飯田悟郎

欽明天皇陵

第二十九代欽明天皇の御陵は檜隈坂合陵(ヒノクマノサカアノミササギ)と呼ばれ、奈良県高市(タケチ)郡明日香村大字下平田字ムメヤマ(梅山)に所在します。

標高九〇米前後のほぼ東西にのびる低丘陵の南西端部にあり、その自然地形を利用して整形し削りだされたもので、全周する周濠を廻らし、主軸を東西にとる三段築成の前方後円墳で、全長一四〇米、後円部径七三米、前方部幅一〇七米、高さは後円部、前方部とも一五米を測るそうです。

近鉄吉野線で橿原神宮前から南へ二駅の飛鳥駅で下車し、国道一六九号線を少し北へもどって、右手の低い丘を上れば、有名な遠石人面石を従えた吉備姫墓があり、そのそばの宮内庁の派出事務所の前面で御陵を参拝できます。

そのほかのルートとしては

明日香村の野口のバス停で下車して南へ下り、橿原市立聖徳中学校の前を過ぎ、鬼のマナイタ、鬼のセツチンを横目で見て西に進んでもすぐですし、明日香巡りのレンタ・サイクルを利用することもできます。尚、御陵印集めの方は、前記の宮内庁の派出事務所付近の幾つかの皇陵を含めて集印に応じてくれます。

この御陵は、非常に形の良い前方後円墳なのですが、どうも本来この形状ではなかったらしく、もともと双円墳であったものを、幕末の文久・元治年間の皇陵修復事業の際、むりやりに前方後円墳にし、埋没した周濠の濠を復元し、堤上に柵をもうけて形を整えた、と後藤秀穂の『皇陵史稿』に記され、文武陵の修復事業とあわせ、一一五八両の巨費が費やされた、と云われています。

欽明天皇は継体天皇の第四子で、手白香皇女を母として誕生し、諱(イミナ)

を天国排開広庭天皇(アマクニオシハルキヒロニワノスメラミコト)と申し上げ、いろいろと業績の高かった方でございましたが、継体天皇の没後、欽明天皇の即位までに、第二十七代安閑天皇、第二十八代宣化天皇の御二方との間に何らかの問題があったのではないかと噂されているのですが、それはともかく、史書に見る限り此の天皇の挙げられた業績は立派なものでございますが、それにくらべ、見事な古墳とは云え、この御陵は少々貧弱であり、本当の御陵ではない、とする意見が学界の一部にはあり、それらの方々はこの古墳を「平田梅山古墳」と呼び、欽明陵と呼ぶことをかたくなに拒否しています、この地が今木の範囲に含まれることから、江戸時代の絵図を引用して、蘇我入鹿・蝦夷の今木双墓であると想定し、真の欽明陵はこの古墳の北側の谷を介してのびている別の丘陵の末端を大きく整形して築造された見瀬丸山古墳だとしています。

橿原から南へ吉野に通ずる国道一六九号線を南下すると、橿原神宮前から見瀬

のバス停を過ぎて、大軽町に入ると、道がゆるやかに右にカーブしながら上り、さらに左にカーブしながら下るところがあります。

ここが見瀬丸山古墳の前方部の西北部を横切る地点なのですが、それと指摘されるまでは、ただの小さな丘陵を上り下りしているとしか思えません。それほどに巨大な古墳なのであり、奈良県下最大、日本でも有数の超大型前方後円墳で、主軸は南東から西北に面し、四段築成、全長三二八米、前方部幅二三八米、後円部に直径五五米ほどの円丘状の墳丘をのせる特殊な形態をとり、現在、此の部分のみが宮内庁の陵墓参考地となつています。

見瀬丸山古墳を有名にしたのは、南に開口する長大な横穴式石室で、長さ八米

強、幅、高さとも四米を越える大きな玄室に通ずる羨道は二〇米に余り、現在知られている範囲では日本最大、内部に見事な家形石棺を二つおさめます。

平成三年に石室が一部露出し付近の子供が内部に入るなどして大騒ぎとなったため、宮内庁が実施した石室密封工事により内部の状況をうかがうことは現在では出来ませんが、この巨大な古墳と立派な石室に埋葬されたお二方がどなたなのか、昔から様々な憶測がなされてきました。

くだくだしい学問的な論証はヌキにしますが、はじめてうわさされた天武・推古両天皇の御陵は、明日香村野口の王墓(オウノハカ)とほぼ定まり、宣化天皇とその妃橘皇女との合葬陵だ、とする意見もかなり有力でしたが、現在のところ欽明天皇とその妃堅塩媛(キタシヒメ)と見るのが最も妥当となつています。

何はともあれ明日香巡りの折にでも、一度詣でられることをおすすめします。

紅蓮洞・坂本易徳 ⑬

岡部忠夫

明治十九年(一八八六)一月工科大学の生徒らは、東京大学と合併反対運動の展開を決議し、文部大臣森有禮への上申書を起草している。以下『東京大学百年誌』から引用しよう。

抑工部大学校ノ教育法タル理論ト実業トヲ兼ネ教ヘ、其理学ハ從來実業ノ基礎トナリ企業心ノ原動力トモナリ、寧ロ実業ニ篤キモ理論ニ走ラス、確乎不拔工業擴張ニ熱心ナル活發有為ノ工業者ヲ養成スルノ御趣旨ニ可有之、然レバ本校生徒タル者既ニ其業ヲ卒ヘ諸工場ニ入り、奮ツテ之カ主任ニ当リ大ニ力ヲ有用ノ工業ニ尽ス者全国殆ント是レアラザル所ナキハ、前条既ニ開陳仕候通ニ御座候(略)東京大学部内理学部ヲ置カレ候ハ、専ラ學術ノ真理ヲ考究シ欧米人未タ曾テ発見セザルノ真理

ヲモ彰揚シ、我邦人工学者ハ申スニ及ハス、欧米工業社会ノ面目ヲ一新セントノ御趣旨ニシテ、寧ロ実業ニ疎キモ理論ノ考究ヲ怠ラス理学ノ研究ヲ第一ノ眼目ト被致候義ト奉恐察候、故ニ東京大学工部大学校ハ同ク大学ノ名称ヲ有スルモ、其精神ノ存スルトコロ組織ノアル所ニ至リテハ全く相同シカラス、二ツノ者有之候テ後始テ理学ノ研究ト工業ノ盛大ヲ期スヘク、工部大学校廃止ノ不可ナル猶ホ東京大学理学部廃止ノ不可ナルト同様ニシテ、毫モ異ナルコト無之候事ト奉存候。

上申書にみる工部大学校生徒の、その率直、真摯な意見には、明治国家の「殖産興業・富国強兵」の標榜を敏感に反応した青年たちの息吹が感じられる。それは、強い民族意識と

高い誇りを持つと共に、きわめてナイーブな心を持つ現在の途上国の若者たちの姿と重なり合う。

しかし、政府には、工部大学校生徒の上申書を受け入れる余地はなかった。

政府は、明治十八年(一八八五)十二月十五日、東京大学理学部の鉱工関係学科を分離して工芸学部を新設、工部大学校との合併の受け皿を作っていた。

工部大学校の文部省移管については、このとき初めて始まったものではない。

明治十三年(一八六八)、その頃大蔵卿であった大隈重信は、工部大学校を文部省に移管合併することを提起している。その意図は、西南戦争の結果窮乏した財政を建て直すための経費削減にあった。この案は、これから学校の経常支出分を管轄する省庁から国庫に吸いあげ、学校組織だけを文部省に移管する方針であったので、両省の折り合いがつかずに立ち消えた。

翌十四年になると、新設されたばかりの農商務省側から、その職制に「官設ノ農工商ノ諸学校及民立ノ農商工学校ヲ監督ス」とある

ことから、これら学校への管理権限の強化を主張した。これに対して文部省は、教育行政の一元化を主張している。この問題は、審議にわたった参事院が農商務省の職制を改正する方向でまとめたため、教育行政への主導権は文部省が保つことで決着を見た。

しかし、明治十七年(一八六八)、工部少輔(次官)の渡邊洪基(のち帝国大学初代総長)は、三條實美太政大臣にあてた意見書の中で、工部大学校が工部省に置かれている意義を次のように強調した。

大学は「学理ノ蘊奥(うんおう)とも読む。学問・技芸の奥深いところ)ヲ極メ其学理ノ用ヲ擴張シ以テ社会ニ益スル者」であるが工部大学校は「其学理ノ成ヲ仰キ各業ノ専門ニ就キテ之ヲ適用シ兼テ実業ニ従事スルノ志想ヲ養成シ直チニ取りテ国家ノ経済ヲ利スル」と。

以上をみると、先に挙げた、工部大学校生徒の上申書は、必ずしも生徒たちの独自の考え方に基づくものではないとも思われる。ところが既に、明治十八

年(一八八五)十二月二十二日、太政官制度を廃止し内閣制度を採用した際、工部省を廃しており、工部大学校は文部省に属し「当時既に東京大学と合併するに定まり、寧ろ大学の制度を根底より改革するに着手しつつ、世に知らざるを防」いだ(三宅雪嶺『同時代史』第二巻)。

帝国大学の発足

工科大学校生徒の反対決議など問題にされず、政府は、その年の三月二日、大学院および法・医・工・文・理の五分科大学を置く「帝国大学令」を公布し、東京大学を帝国大学と改称、工部大学校を帝国大学に合併した。

この両校の合併について三宅雪嶺は「帝国大学と称せること、其れのみにて世間の荒膽を拉ぐに足」としている(前掲書)。

丹沢の植物

(22)

きかわしろう
城川四郎

ニッコウヒョウタンボクはヒョウタンボク(瓢箪木)の仲間である。日光で発見されたことからその名があるが、関東から近畿にかけて分布が知られている。

しかし、神奈川県では、わたしが丹沢山の北側で三〇年以上前に採集したことがあるだけで、それ以前にも、その以後にも記録がない。だから、神奈川県ではかなりめずらしい植物で、分布地は丹沢だけということになる。図はその採集したときに描いたものであるが、そのときはもっと他の場所にも生えていて出会う機会があるだろうと思っ

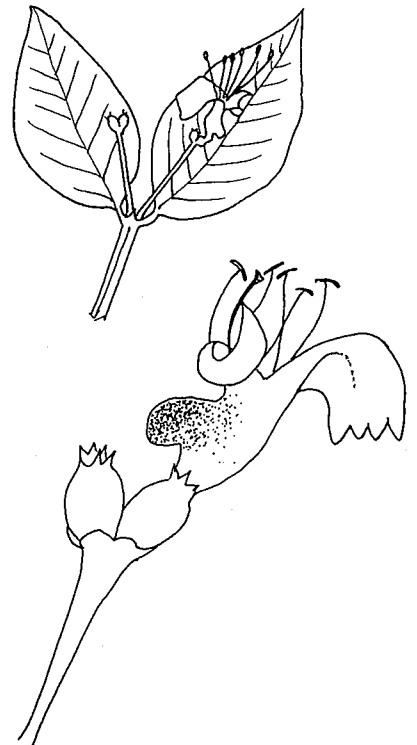
いたので、観察が少し甘かったと後悔している。

瓢箪木というのは、果実二つが基部で合着してつながっている様子を瓢箪にたとえたもので、風変わりなこの仲間の果実を見ると誰もが興味を持つ。

図の花の拡大を見て頂けば、のちに果実になる子房が二つ並んで、その基部がくっついていることから、果実の様子も想像して頂けよう。

この仲間の果実は、赤く熟しておいしそうに見えるが、有毒な種類もあるのでうっかり食べるわけにいかない。

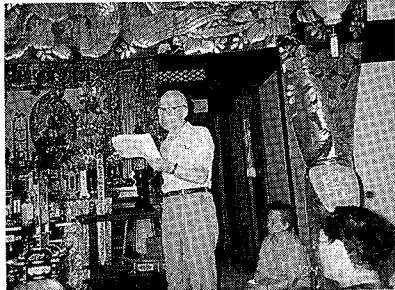
ニッコウヒョウタンボク(すいかずら科)
Lonicera mochidzukiana Makino



筆者原図

でも平気だったけど、あんまりうまくないね」という報告を聞いて無毒らしいことが分かった。ニッコウヒョウタンボクが無毒かどうかわたしは知らないが、とにかく再会したいと願っている植物の一つである。

蓮華寺にて 富田会長



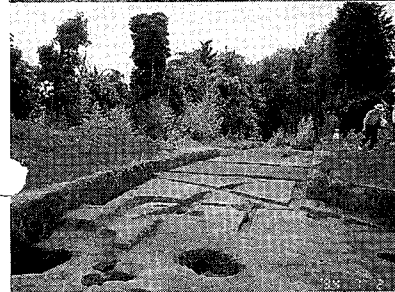
長立庵寺にて



弥生時代遺跡



弥生時代遺跡



写真

高橋 佐年



大黒天 円宗寺



阿弥陀如来 円宗寺

千代台遺跡めぐり
平成6年7月20日

雑誌紹介

◇時空(じくう) 94・10 第五号

発行人 鈴木 一正

発行所 〒233横浜市港南区

日野一 二一九四
鈴木一正方「時空の会」
A5三頁五〇円
二二〇円

〈小説〉ライラック高気庄 篠原 敦子

〈論評〉戦無派の昭和史

—なぜ「戦争だったのか

(その一) 菊田 均

〈研究資料〉最近における
透谷研究文献目録(3)

—平成五年一月〜十二月
鈴木 一正

「時空」の反響であるが、
四号迄に掲載の小説、座談
参考文献が「週間読書人」
「国文学」「文芸年鑑平成6
年度版」などに取りあげら
れた由。

(なお、発行者の鈴木一正さ
んは小田原史談会々員)

落穂集

◎前号に掲載の、去る七月
二十九日、小田原大橋渡り
初めの、三代にわたる何組
かの家族が打揃って渡って

いる写真の中で、一きわ目
だったのは、南町にお住い
の中学校音楽の先生と女性
コーラス指揮者の松本さん
ご夫妻のご一家です。

お祖父様は、例年の過ご
し方とは打って変わって今
年はクーラーを止めて、身
体を鍛えこの日に臨んだそ
うで、若いお嫁さんは、礼
装用留袖を新調する幸運に
恵まれ一番嬉しそうだった
とか。

式の数日前になって当局
から、この暑さですから軽
装で結構ですと申し出があっ
たそうですが、松本家は最
初の計画通り礼装で堂々参
加されました。

この日に向かって家族の
皆さんがそれぞれに、素晴
らしい渡り初めが無事に出
来ますようにと、努力を惜
しまなかつた姿にエールを
送りたい。

◎本年度から会員となられ
た秦野市の田村恵補さんか
ら、小田原史談第一五八号
の「地震特集は大変興味深
く拝読しました。特に市川
一郎氏の「地震の動きを見
た話」は、初めて聞くこと
で、貴重な記録だと思いま
す」とのお便り。田村さん
の勤めは気象庁です。

◎前号の地震特集は、反響
が大きかったようで、ある
高校の要望もあり、百部を
増刷。また、小田原市立か
もめ図書館開館記念に去る
十一月三日(木)から十三(日)迄
で開かれた『北村透谷没後
一〇〇年展』に、透谷特集
の一五六号、一五七号の供
与の要請があり各五十部を
増刷。地震特集の増刷分と
共に印刷所の好意で無償提
供を受けました。紙上をか
りて感謝の意を表します。

◎小田原文学館のもと田中
光顯伯の別荘の敷地建物が、
小田原市のものとなる前は、
ある保険会社の所有でした。
建物は、会社の迎賓館とし
て使われていたようですが、
数年前会社は、ここに老人
用マンション建設を目論み
ました。しかし、地域の人々
が建設反対運動を展開した
ため、会社は計画を取り止
めたに経緯があります。

◎ちょっと旧聞ですが、昨
夏の猛暑で片浦・湯河原方
面のハウス・ミカンは色つ
きが悪く、出荷は八月末例
年より廿日ぐらい遅れた由。

◎紙面の都合で、片岡永左
衛門「震災日記」、「歴史詠
みこみ川柳」は次号以下に
掲載の予定。

小田原史談会行事

多摩史跡めぐり

平成六
年九月

二十一日(休)晴 七時出発十
九時二十分帰着

「コース」小田原・厚木道
路荻窪IC。厚木IC。橋本
日野市・高幡不動尊(金剛
寺)―土方歳三墓(石田寺)―
土方歳三生家―国立府中IC。―
調布IC。調布市・深大寺・
昼食(八起)―国分寺市・
国分寺跡:文化財保存館:
文化財展示室(市立第四小
学校構内)―府中市・大國魂
神社―府中市博物館・府中
市郷土の森―川
崎IC。厚木IC。―
荻窪IC。
(参加費用)七
千円
(参加者)順不同
敬称略
飯田悟郎、和田登、
杉山竹二、向山重忠、
富田千春・キミ江、
剣持芳枝、山口広子、
増田任司、勝保孝、
田中千恵子、譲原美
代子、菊地八千代、
野口よし、菊地貞良、
田中種久、石川タカ
子、小西マツ、額田好男・ツネ子、
本多孝三、力石郷水、田中悦子、
木曾しげ子、相原俊夫・佐和子、
川添ヨシ子、高城敏子、岡部忠夫、
吉池清、曾我保夫、山口一夫、加
藤松江、形岡タミ子、角田道、和
田治助、佐藤一江、内田公子、西
郷富子、湯川玲子、早野尊子、小
室泰子、三尋木啓子、内田美枝子、
種子藤江、土谷桂子、柏木ミツ、
志村久。
以上四十八名(マイクロボス二台)



大國魂神社にて

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 足柄香粧株式会社
 飛鳥 魚屋
 紳士服の アメリカヤ
 (株) アルファ
 画材 ガクブチ ぬえ
 伊勢治書店
 伊豆箱根トラベル 小田原営業所
 かまぼこ
 南足柄関本 おぎの整形外科・歯科
 税理士 小澤重治事務所
 公認会計士
 株式会社 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 株式会社 オートセンター・スギヤマ
 小田原中央青果 株式会社
 オリオン座
 かまぼこ籠 清
 令学苑
 鐘紡株式会社小田原工場
 カネボウ化粧品鶴宮工場
 神尾食品工業 株式会社
 木地挽 日下部産業 株式会社
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 (有)小松石材店
 さがみ信用金庫
 趣味のごぶく さくらい
 宝飾専門店 Shimano

中華料理 昇玉
 杉山水道工業 齋
 杉山 廣木まぼこ
 辰寿堂スポーツ
 大営不動産
 割烹 おる海
 茶半家具株式会社
 ちんぎょう本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トーホー建物 齋
 和菓子 菜の花店
 八小堂書
 八子マサ店
 平井書
 富士写真フィルム齋小田原工場
 株式会社 報徳
 栄町 松坂屋
 学生専科 丸マルク
 食器の店 マルサンストア
 みつゆき設計
 諸星運輸グループ
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
 株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所
 防災器具 優光社

白河・那須・下野 方面史跡めぐり
 平成六年十一月十七日(木)
 十八日(金)一泊二日
 (コース)七時小田原駅前
 発 小田原・厚木道路小田
 原東.I.C. 厚木.I.C. (東名高速
 道) 港北.I.C. (首都高速
 道・東北自動車道) 羽生.I.C.
 那須高原.I.C. 白河.I.C. 白河・
 小峰城跡 昼食 (ドライブ
 イン湖月) 南湖公園 白
 河関跡 雲巖寺(黒羽町) 笠石神社(那須国造碑) 下侍塚: 栃木県立なす風土記の丘資料館湯津上館(湯津上村) (大田原市) 塩原温泉 十七時二十五分着 (ホテルニュー塩原泊) 八時三十分出發 (日光・塩原もみじライン) 竜王峡 報徳二宮神社・尊徳翁墓所・如来寺 昼食 (けっこう漬本舗) 今市.I.C. (日光宇都宮道路) 宇都宮.I.C. (東北自動車道) 蓮田.S.A. 海老名.S.A. 厚木.I.C. 荻窪.I.C. 小田原駅 十七時四十分帰着。
 (参加費用) 三万五千円 (参加者) 順不同敬称略
 富田千春、岡部忠夫、飯田信郎、曾我保夫、杉山竹二・房枝、相原俊夫、角田道、劍持芳江、山口広子、向山重忠、額田好男・常子、中島広子、遠藤茂子、神尾隆之、種子藤江、瀬戸崎雄。以上十八名



白河・那須・下野方面史跡巡り
 黒羽町・雲巖寺

年会費 普通会員三千円
 〇〇二〇三六四三三六